

令和4年度

教員個人評価の集計・分析報告書

令和5年9月

佐賀大学

理工学部評価委員会

## 目 次

令和4年度教員個人評価について.....	1
1. 教員個人評価の実施状況.....	3
1.1. 対象教員数、個人評価実施者数、実施率など.....	3
2. 教員個人評価の実施概要.....	3
2.1. 評価組織.....	3
2.2. 実施内容、方法等.....	3
2.3. 個人評価の実施経緯.....	4
【補足資料】.....	7
A. 理工学部が組織的に行った特色ある教育研究活動等.....	7
B. 評価領域別の集計及び分析.....	10
(1) 教育の領域.....	10
1) 講義担当等に関する事項.....	10
2) 教育改善に関する事項.....	13
3) 教育研修・FDに関する事項.....	19
4) オフィスアワーの設置と学生相談に関する事項.....	22
5) 学生の受賞等.....	23
(2) 研究の領域.....	25
1) 著書、論文等の発表実績.....	25
2) 共同研究などに関する活動実績.....	27
3) 受賞等の実績.....	29
(3) 国際・社会貢献の領域.....	30
1) 国際交流実績.....	30
2) 社会貢献実績.....	32
(4) 組織運営の領域.....	38
C. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価.....	40
(1) 各領域における自己点検評価点ならびに達成度.....	40
(2) 評価委員からのコメント.....	41

## 令和4年度教員個人評価について

理工学部における教員の個人評価は、各教員から提出された個人目標申告書、活動実績報告書及び自己点検・評価書に基づき、理工学部評価委員会の下に置かれた理工学部個人評価実施委員会において行うこととされ、本報告書はその令和4年度分を取りまとめたものです。

教員自己点検・評価は、まず各教員が教育、研究、国際交流・社会貢献および組織運営の4つの観点から5段階で評価を行います。次に個人評価実施委員会が、教員の資質向上と諸活動の活性化、ならびに本学および理工学部と理工学研究科・工学系研究科の目標達成に向けた活動という観点から個人評価点の妥当性を点検してフィードバックします。

各部門の詳細は本編に記載されていますので、ここでは理工学部全体について総括します。

本年度は昨年度に引き続きコロナ禍により制限の多い1年となりましたが、全ての教員が回答していることにより、各教員が4つの観点を意識して積極的に日々の業務を実施していることが伺えます。評価の4つの観点全てに対して大きな成果を上げることが期待されますが、特に教育と研究は大学の使命であり、高いレベルが求められています。

教育活動では、多くの授業は対面授業となりましたが、そのような中でも学生・教職員の健康に配慮して、対面とオンラインの2重体制にせざるを得ない授業が多くありました。このことは、学部改組の過渡期であることや博士後期課程の改組および教員の減少などと相まって、学部構成員に対する極めて大きな負担となりました。しかしながら、このような困難な状況にありながらも、各教職員の努力と創意工夫によりこの難局を無事に乗り切るばかりでなく、例えば、コロナ禍の中で蓄積してきたオンラインコンテンツを活用して学生の時間外学習の質を飛躍的に向上させたことなどは、教員をはじめとする本学部構成員の実力の高さを示しています。また、教育の国際化を推進するものとして、大学院戦略的国際人材育成プログラム(SIPOP)やAI・データサイエンス高度人材育成プログラム(EPAD)に加えて、環境・エネルギー・健康科学グローバル教育プログラム(EPGA)の後継プログラムとしてASEANと日本の共発展を目指すT型高度人材育成プログラム(EPAT)が新しく採択され、本学の国際化を強力に牽引しています。昨年度開始した大学院生向けの短期留学プログラム(SPACE-SE)では、本プログラムの終了生が本国に戻った後に国際会議で最優秀論文賞を受賞したなどの嬉しい知らせも届いています。

データサイエンス教育については、本年度に全学的に数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)の認定を受けたことに引き続き、理工学部において全学展開に先行して応用基礎レベルの教育を実施しました。これらのプログラムの実施にあたっては本学部教員の大きな貢献があったことは言うまでもありません。また、自治体や地元企業とともに高度情報系人材育成懇談会を作り、ステークホルダーの皆様のご意見を取り入れて、令和5年度に新しくデータサイエンスコースを理工学部を設置することとなりました。

研究指導においても、きめ細かな指導が行われており、学生受賞は43件と昨年度の約1.2倍になっています。

研究においても同様に、厳しい状況の中にあっても各教員が高いアクティビティを維持し、多くの学術論文の出版、60 件以上の共同研究や科研費などの外部資金を使った研究の実施、21 件（昨年度の 1.5 倍）の受賞という良好な成果を上げています。

国際交流においてもコロナ禍の影響が続いていますが、組織的な取り組みである国際パートナーシップ教育プログラムを 5 件実施しています。また、オンラインを活用した国際学会への参加や留学生の受け入れも行っており、それぞれの教員ができることを着実に実施しています。

社会貢献では、高大連携やリカレント教育による地域教育への参画、各種自治体の審議会・委員会構成員としての地域貢献、学会役員としての学会活性化への取り組みなど、170 件を超える取り組みにより佐賀県を中心として広く社会に貢献しています。

組織運営は、全教職員が日々の業務に真摯に取り組むとともに、多くの教員が学長補佐や室長、他部局・センターの運営委員・併任教員を務めることにより本学部のみならず全学の運営にも大きく貢献しています。

理工学部では、全てのステークホルダーの皆様から頼りにされる存在になるということをお大義としています。本報告書に示されているように、この大義の実現に向けて各教員はそれぞれの自由闊達な発想により PDCA サイクルを回し、改善を続けています。これからの我が国は女性の活躍なくして発展していくことができないでしょう。これは理工系の分野でも変わりなく、理工学部としても理工系産業に貢献してくれる女性技術者・科学者を育成すべく力を入れているところです。令和 4 年度は新規教員・プロジェクト助教の採用、教授・准教授への昇任人事を行いました。大量定年退職の時期を目前として、教員数の減少に伴う教育・研究への影響は大きく、これからもステークホルダーの皆様には価値を提供し続けていけるよう人員充実を大学執行部に訴えていきます。そして、各教職員には今後もそれぞれの幸せと佐賀大学の発展に向けて高いアクティビティで活躍してほしいと願っています。これからも教職員一丸となって取り組みますので、皆様のご指導・ご鞭撻ならびにご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

理工学部長  
豊田 一彦

## 1. 教員個人評価の実施状況

### 1.1. 対象教員数、個人評価実施者数、実施率など

理工学部所属の教員（教授、准教授、講師、助教）に対して、別紙様式1～4に関して教員個人評価を実施し、下記表の全員から回答を得た（回答率100%）。（令和5年7月1日現在）

部 門	回答教員数	回答率(%)
数理	8	100
情報	17	100
化学	22	100
物理学	12	100
機械工学	25	100
電気電子工学	21	100
都市工学	20	100
<b>理工学部（合計）</b>	<b>125</b>	<b>100</b>

## 2. 教員個人評価の実施概要

### 2.1. 評価組織

【理工学部評価委員会ならびに理工学部個人評価実施委員会】

委員長	豊田 一彦	（学部長）
委員	佐藤 和也	（副学部長・評議員、研究・社会貢献・就職担当）
委員	皆本 晃弥	（副学部長・情報部門長、教育・入試担当）
委員	山西 博幸	（副学部長、評価・広報担当）
委員	半田 賢司	（数理部門長）
委員	竹下 道範	（化学部門長）
委員	真木 一	（物理学部門長）
委員	松尾 繁	（機械工学部門長）
委員	杉 剛直	（電気電子工学部門長）
委員	日野 剛徳	（都市工学部門長）
委員	岡崎 泰久	（教務委員会委員長）
委員	川喜田 英孝	（教育質保証委員会委員長）
委員	松永 貴光	（理工学部事務長）

### 2.2. 実施内容、方法等

理工学部個人評価実施基準に基づき、令和4年度の活動実績について、4領域（教育、研究、国際交流・社会貢献、組織運営）の個人評価を行った。詳細は、補足資料に記した。

### 2.3. 個人評価の実施経緯

- ① 令和5年2月1日
  - 学部長は、退職(予定)教員に対し、令和4年度活動の自己点検・評価を行い、別紙様式1、3、4を令和5年3月31日までに提出するように依頼した。
- ② 令和5年3月3日
  - 学部長は、全教員に対し、教員活動データベース及びポートフォリオシステムについて、それぞれ、令和5年3月31日までに入力するように依頼した。
- ③ 令和5年3月3日
  - 学部長は、退職(予定)教員以外の全教員に対し、令和4年度活動の自己点検・評価を行い、別紙様式1、3、4を令和5年4月28日までに提出するように依頼した。同時に、令和5年度の各様式もメールにて送付し、別紙様式1（令和5年度活動の「個人目標申告書」）の作成・提出も併せて依頼した。
- ④ 令和5年4月20日
  - 教員活動データベースシステム全学管理責任者から、全教員に対し、教員活動データベースへの入力について依頼があった。
- ⑤ 令和5年5月10日 第1回理工学部評価委員会開催
  - 令和4年度教員個人評価のスケジュールを決定した。
  - 令和4年度教員個人評価集計と分析報告書（様式）について決定した。
  - 理工学部個人評価用集計シート及び理工学部・理工学研究科・工学系研究科個人業績集約方法の様式を決定した。
  - 令和5年度理工学部自己点検・評価スケジュールを決定した。
- ⑥ 令和5年5月10日
  - 副学部長(評価担当)は、個人評価実施委員(各部門長)に、各教員から提出された令和4年度の各別紙様式(1、3、4)、「個人評価用集計シート」、「個人評価用集計ツール」、「個人業績集約の方法」、「令和4年度教員個人評価(部門)集計と分析報告書」の様式を送付し、「令和4年度教員個人評価集計と分析(部門)」の作成を依頼した(USBメモリーを手渡した)。
- ⑦ 令和5年5月10日
  - 学部長は、個人評価実施委員に、令和4年度活動の「個人目標申告書」(別紙様式1)、教員活動データベース、ポートフォリオ学習支援統合システム評価基礎情報、及び「個人評価結果」(別紙様式3)に基づいて、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、これらを基に評価を行い、令和4年度活動の「個人評価結果」(別紙様式4)への記載を依頼した。
- ⑧ 令和5年5月31日
  - 個人評価実施委員は、令和4年度活動の「個人評価結果」(別紙様式4、別紙様式1、3

も含む) を学部長へ報告した。

⑨ 令和5年7月7日

- 個人評価実施委員は、「令和4年度教員個人評価集計と分析(部門)」を学部長へ報告した。

⑩ 令和5年6月30日～7月14日

- 学部長は、令和4年度活動の「個人目標申告書」(別紙様式1)、教員活動データベース、ポートフォリオ学習支援統合システム評価基礎情報、及び「個人評価結果」(別紙様式3)に基づいて、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、個人評価実施委員が記載した令和4年度活動の「個人評価結果」(別紙様式4)の評価内容を確認し、必要があれば評価結果の補足等及び学部長コメントを記載した。なお、学部長は、審査にあたり、審査の公平性を確保するために、必要に応じ、他の職員から意見を求めた。また、学部長は、必要に応じ、評価内容について、当該教員から意見を聴取した。

⑪ 令和5年7月26日

- 副学部長(評価担当)は、理工学部の令和4年度教員個人評価集計・分析報告書(案)を取り纏めた。

⑫ 令和5年8月1日

- 学部長は、令和4年度活動の「個人評価結果」(別紙様式4)および「令和4年度教員個人評価集計と分析(部門)」を、当該教員に通知した。
- 各教員は個人評価の結果に対して異議がある場合は、通知後2週間以内に異議申立書(様式任意)を学部長に提出することとなった。

⑬ 令和5年9月4日

- 学部長は、理工学部の教員個人評価集計・分析報告書を作成し、理工学部評価委員会に対し、本学部の教員個人評価結果の総合的な検討を付託した。

⑭ 令和5年9月4日

- 評価委員会は、本学部の教員個人評価結果の総合的な検討を行い、同報告書を承認し、その結果を学部長に報告した。

⑮ 令和5年9月下旬

- 学部長は、「教員個人評価集計・分析報告書」を添えて理工学部教員の個人評価結果を学長に報告した。

#### <添付資料>

佐賀大学大学評価の実施に関する規則(平成17年3月1日制定)

佐賀大学理工学部における教員の個人評価に関する実施基準

「理工学部における個人達成目標の指針」(教員用)

個人目標申告書(別紙様式1)

教員報告書(別紙様式2): 理工学部教員活動実績年次報告書(推奨様式)に読み替え

自己点検・評価書（別紙様式3）

個人評価結果（別紙様式4）

## 【補足資料】

### A. 理工学部が組織的に行った特色ある教育研究活動等

理工学部教員ならびに職員（教育研究支援職員及び事務系職員）が組織的に一丸となって行った教育研究活動等を以下に示す。

- 環境・エネルギー・健康科学グローバル教育プログラム（EPGA）（令和2年10月より）
  - ・ 科学技術の向上には、環境・エネルギー保全の観点からの取り組みに加え、健康科学の普及も必要との考えをもとに、これまで外国人留学生と日本人学生が共学し、一定の成果を上げてきた環境・エネルギー科学グローバル教育プログラム（PPGA）をさらに継続深化させた教育カリキュラムとして、令和2年10月（前期および後期課程）にスタートさせた。令和4年度の国費留学生の募集に海外から16名の応募があり、4名の受入れを決定した。在日及び私費留学生の募集には、15名が応募し、14名を受け入れた。
  - ・ 博士前期課程プログラムは、理工学研究科の機能材料化学コース、機械エネルギー工学コース、機械システム工学コース、電気電子工学コース、都市基盤工学コース、建築環境デザインコース、先進健康科学研究科の生体医工学コース、健康機能分子科学コースの教員が担当した。また、博士後期課程プログラムは、理工学研究科理工学専攻の化学、機械、電気電子、都市、先端融合分野の教員が参画した。
- AI・データサイエンス高度人材育成プログラム（EPAD）（令和4年10月より）
  - ・ 理工学研究科では、AIやデータサイエンスによる技術革新に貢献するグローバルな研究者や技術者の育成を目指した新たな高度人材育成プログラム（EPAD）の設置が文科省から認められ、令和4年10月から博士前期および博士後期課程の学生募集を開始した。EPADには、理工学研究科のデータサイエンスコース、知能情報工学コース、機械エネルギー工学コース、機械システム工学コース、電気電子工学コース、先進健康科学研究科の生体医工学コースの教員が参画している。また、博士後期課程プログラムは、理工学研究科の数理・情報サイエンスコース、機械・電気エネルギー工学コース、バイオ・マテリアルエンジニアリングコースの教員が参画している。令和4年度の国費留学生志願者数は10名（博士後期課程5名、前期課程5名）で、募集定員を超える応募があった。
- 大学院戦略的国際人材育成プログラム（SIPOP）（平成19年10月より）
  - ・ 佐賀大学大学院理工学研究科博士後期課程の教育プログラムで、学術交流協定に基づいて実施されている国際共同研究や国際共同教育を強化し、佐賀大学特有の実質的な国際活動を発展させるために、佐賀大学独自の奨学金制度（佐賀大学奨学金留学制度）を設け、アジア諸国から外国人留学生を博士後期課程に受入れるものである。本プログラムは、理工学研究科博士後期課程担当の教員が参画している。令和

4年度は1名を受け入れた。

- 佐賀大学短期留学生受け入れプログラム（SPACE）（平成13年度より）
  - ・ 佐賀大学の交流協定校に所属する学生を対象とした短期留学プログラムで、学部学生を対象とした英語コース（SPACE-E）がある。本プログラムは、佐賀大学での学習や研究、また日本人学生や地域の人々とのふれあいを通じて、日本社会についての知識や理解を深めるもので、理工学部でも積極的に学生の受け入れや講義、自主研究を担当している。なお、コロナ感染症の影響もあり、令和4年度に理工学部で受け入れたSPACE-E学生は1名であった。
  - ・ 令和3年度からSPACE-SE（大学院博士前期課程・後期課程を対象）を新たに設置し、短期留学プログラムの充実を図っている。令和3年秋学期にオンラインで3名を受け入れていたが、SPACE-E同様、コロナ禍のため、令和4年度にSPACE-SE学生としての新規受け入れはなかった。
- 国際パートナーシップ教育プログラム（平成16年度より）
  - ・ コロナ禍の影響もあり、一部予定していたものの中止があったものの、令和4年度は5件実施した。パートナー機関は、遼寧大学（中国）、延世大学（大韓民国）、武漢大学 電気及び自動学院（中国）、ランブンマンクラット大学・ハサヌディン大学（インドネシア）、カントー大学（ベトナム）、国立勤益科技大学（台湾）で、化学部門、物理学部門、電気電子工学部門、機械工学部門、都市工学部門の教員が参画した。
- 佐賀大学データサイエンス教育プログラム（令和3年4月より）
  - ・ 今後のデジタル社会において、数理・データサイエンス・AIを日常生活や仕事などの場で利活用できる人材育成を目的に、令和3年度から「数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル）モデルカリキュラム～データ思考の涵養～」に準拠した「佐賀大学データサイエンス教育プログラム（リテラシーレベル）」を理工学部では必修化して実施した。また、令和4年度からは「数理・データサイエンス・AI（応用基礎レベル）モデルカリキュラム～AI×データ活用の実践～」に準拠した「佐賀大学データサイエンス教育プログラム（応用基礎レベル）」も理工学部で必修化して実施した。
- 佐賀大学理工学研究科博士後期課程（令和3年4月より）
  - ・ 令和3年4月に、これまで理学および工学の融合領域を含む学問領域の高度人材育成課程として組織していた工学系研究科博士後期課程を理工学研究科博士後期課程として改組した。本教育課程の編成の特色としては、Society5.0の推進や社会のニーズに合わせた教育の実践とともに、高度な専門的知識と論理的思考力を持って社会のグローバル化に対応できる実践力に富む人材育成を目指すものである。令和4年度の入学者は、16名であった。
- 学生の留年率、就職率、進学率の改善に対する取組み

- ・ チューター制度をはじめ、教務課・学生支援室と協力し、定期的に学生の就学状況等をチェックしつつ、コース配属から卒業まで学生に対するきめ細やかなモニタリングを実施している。また、コロナ禍で得た様々な web 会議システムやコミュニケーションツール（Microsoft Teams など）を活用し、学生との情報共有や意見交換を行うことで、理工学部全教員が一丸となって学生の留年率、就職率等の改善を進めている。
- 高大連携事業
  - ・ ジョイントセミナーは、理工学部教員が高等学校を訪問して行う模擬授業で毎年高校側の要請に応じて、ミニ講義、模擬講義、大学・学部・学科の紹介を実施している。令和 4 年度は 15 件実施し、そのうち対面で 12 件実施した。
  - ・ 高大連携活動の一環として、理系分野に関心がある県内の高校生を対象に、「科学」を発見・探求できる多面的な視点を育て、自らが知らなかった自身の適性や興味・関心を見つけることを目的としたカリキュラムとして、「科学へのとびら」を実施している。令和 4 年度に第 7 期生（高校 1 年生）を募集し、対面で 3 回実施している。
- 佐賀県立致遠館高等学校スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業
  - ・ これまで、第 1 期から第 3 期まで継続的な高大連携活動として取り組んでおり、令和 4 年度からの第 4 期も同校からの依頼で、積極的にサポートをしている。第 4 期から、生徒の志望学部をベースとした研究分野の指導要望に沿って、理工学部各部門の教員が高校を訪問して、課題研究指導に携わっている。
- リカレント教育の推進
  - ・ 高度技術研修「ものづくり技術者育成講座」に対して、理工学部教員が核となり、「電気電子コース」、「材料力学コース」、「機械力学・制御コース」、「分析化学コース」、「高校から大学への化学コース」などの講義を実施している。令和 4 年度は 8 月から 9 月末にかけて実施し、34 名の受講があった。
- 理工系女子学生の進路支援および人材育成のための広報活動
  - ・ 理工系を目指す女子学生の母数拡大を目指すため、在学生や卒業生の実情を中学生、高校生および父兄保護者を含めて、広く周知し、ダイバーシティ推進室および理工学部同窓会とともに協力しながら、広報活動を進めている。
- 環境美化エコ活動
  - ・ 光熱水量使用料金の抑制：平成 18 年度から使用量に応じて負担する受益者負担制度を導入、夏季および冬季の空調交互運転、エアコン、照明器具の更新に当たっては省エネタイプに切り替え、夏季および冬季の節電パトロールを実施した。

## B. 評価領域別の集計及び分析

### (1) 教育の領域

#### 1) 講義担当等に関する事項

表 B. 1 に教員の担当科目数（学部、修士）、担当コマ数（半期当り換算）、卒業研究指導学生数、修士特別研究指導学生数、博士研究指導学生数（主指導）の平均値を示している。

表 B.1 教員 1 人当たりの講義担当、指導学生数

部 門	職 位	学 部 (教養教育科目を含む)			大 学 院			
		担当科 目数/ 教員	担当コ マ数	卒研学 生指導 数	担当科 目数/ 教員	担当コ マ数	修士学 生主任 指導数	博士学 生主任 指導数
数理	教 授	5.75	5.28	3.50	2.00	1.07	0.67	0.00
	准教授 (含講師)	7.00	5.64	3.25	2.00	1.61	0.80	0.20
情報	教 授	6.57	5.30	4.71	2.71	3.69	2.86	0.57
	准教授 (含講師)	5.71	8.85	5.00	3.00	3.84	4.71	0.71
	助 教	1.67	2.67	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
化学	教 授	11.08	9.94	3.42	7.00	5.37	4.17	0.58
	准教授	9.00	5.77	2.83	4.83	2.12	3.33	0.17
	助 教	4.50	5.25	2.25	0.50	0.50	0.25	0.00
物理学	教 授	5.86	6.00	2.57	2.29	1.86	1.71	0.00
	准教授	4.80	5.07	2.40	1.60	1.09	1.60	0.60
機械工学	教 授	5.11	5.07	3.11	3.56	3.56	4.67	1.22
	准教授 (含講師)	5.60	4.65	3.00	2.25	1.49	3.17	0.17
	助 教	1.50	2.75	1.25	0.25	0.02	0.25	0.00
電気電子工学	教 授	4.00	3.16	3.67	5.00	2.44	6.33	0.56
	准教授 (含講師)	5.44	6.80	2.78	3.89	2.26	3.44	0.22
	助 教	2.00	2.33	0.33	0.00	0.00	0.33	0.00
都市工学	教 授	7.33	10.02	4.22	3.44	3.38	3.00	1.33
	准教授 (含講師)	6.67	6.76	4.44	3.33	2.70	3.22	0.44
	助 教	2.00	3.00	2.00	0.00	0.00	0.00	0.00

受講生数は教務システムに登録された履修者数  
授業担当コマ数は、半期当りに換算する。（通年1コマの科目は2コマとする。）1科目を複数  
教員で担当する場合は、実働時間とする。

#### 【数理部門】

- 教授と准教授は概ね同数の科目を担当している。卒業研究や修士課程の主任指導に関しても、教授と准教授は概ね同数の学生を担当している。
- 博士後期課程の主旨導の有資格者として博士課程学生を指導している准教授もいる。
- 前年度と比べ、一人当たり担当科目数が増加した。前年度末の教授 1 名転出とその後の不補充によるものと考えられる。

#### 【情報部門】

- 教授は、学部において、准教授よりも多くの科目を担当している。また、約半数の教授が、博士後期課程の主旨導資格者として博士学生を指導している。
- 准教授は、平均として、教授よりも多くの学生指導をしている。一部の准教授は、博士後期課程の主旨導資格者として博士学生を指導している。
- 助教は主に実験指導を担当している。
- 学生指導の人数に不均衡がみられる。これは、教員の研究分野に依存する部分もあると思われる。

#### 【化学部門】

- 教授は、学士課程と博士前期課程をあわせて年間 11 科目程度を担当している。准教授は、学士課程と博士前期課程をあわせて年間 9 科目程度であり、コマ数でも若干少ない講義担当となっている。近年、これらの担当科目数とコマ数は高い数値となっており、教員の教育負担が過度になっていることがわかる。教授・准教授は、学生実験科目も担当しているので授業のエフォートは大きい。助教は、教授や准教授に比べると授業科目の担当数が少ないが、主に実験及び演習科目の指導を担当するとともに、主要授業科目以外の科目を担当している。
- 博士前期課程の研究指導に関しては、教授と准教授はそれぞれ約 4.2 人と 3.3 人の学生を指導している。助教は、4 年次卒業研究着手時の配属学生数が教授や准教授よりも少ないので、学士課程の指導学生数は少ない。さらに、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習や生活相談など）を行っていることが報告されている。博士後期課程に関しては、主旨導の有資格者の多くは教授であるので、教授が主に博士後期課程学生を指導している。また、副指導教員となって、実質指導を行っている教員もいる。

#### 【物理学部門】

- 教授の平均的担当科目数は、1 科目程度、准教授より多い。卒研指導学生数、修士主任指導学生数には、教授と准教授にほとんど差はみられない。
- 博士課程の主旨導有資格者として、博士学生を 3 名指導している教員（准教授）がいる。
- 改組により、理工学科の共通専門基礎科目や理工学研究科の新規開講科目の担当が必要となり、教育負担は増加した。一方で、改組から 4 年が経ち、過渡期の措置で

あった旧課程の科目はほとんどなくなったため、前年度よりも全体の担当科目数は減少している。

- 卒研指導や修士主任指導の負担はなるべく均等になるよう、措置を講じている。

#### 【機械工学部門】

- 講義担当科目数について、学部科目は教授に比べて准教授が若干多く担当しているが、大学院科目は教授が准教授より多く科目数、コマ数を担当している。卒業研究の指導学生数について、教授と准教授は概ね同数を担当している。修士学生主任指導数については教授が准教授より多く指導している。これは学生の進学希望等により年度により指導学生数が変動している。准教授においては博士後期課程の主指導を、助教においては博士前期課程の主指導を行っている教員もいる。
- 助教は機械エネルギー工学・機械システム工学実験、機械工作実習Ⅰ・Ⅱなどの実験・実習の指導、および創造工学入門を担当している。

#### 【電気電子工学部門】

- 准教授は教授よりも学部に関しては多くの科目を担当している。これは、准教授が学生実験の科目を担当しているためである。また、准教授の中に、博士後期課程の主指導の有資格者として博士学生を指導している教員がいる。
- 助教は主に実験指導と学部科目を担当している。指導する学生数は平均 0.33 人で前期後期を通じて 2.33 コマを担当している。また、助教の中に、博士前期課程の主指導の有資格者として修士学生を指導している教員、教授あるいは准教授の学生指導の支援を行っている教員がいる。

#### 【都市工学部門】

- 新カリキュラムが進行したこと、教員補充が進まないことにより、昨年度に比べ担当科目数、担当コマ数ともに全体的に増加している。
- 准教授および助教に比べ、教授は学部、大学院ともに多くの科目を担当している。
- 卒研学生指導数について教授と准教授がそれぞれ担う人数はほぼ同数、修士学生主任指導数についても同様、博士学生主任指導数について教授の担う人数は准教授を上回る形で教育が負担されている。
- D○合の資格を有する准教授は、主任指導教員として博士学生の指導を行っている。
- 助教は、建築デザイン学において主に製作指導を担当している。昨年度の後学期に着任したプロジェクト助教のデータは削除している。
- 講師を含む准教授以上の職位における卒研学生指導数はほぼ 4 人余、修士学生主任指導数は 3 人余、博士学生主任指導数は 0.44 人から 1.33 人である。
- 令和 3 年度に比べ、令和 4 年度では卒研学生指導数の平均数に 1 名程度の減少が生じている。正規の学年の卒業研究着手数で満たされ、過年度生の同数が減少していることなどが考えられる。修士学生主任指導数は増加している。進学意欲の高い卒研学生数の増加の表れと考えられる。博士学生主任指導数について、ほぼ同数が維

持されている。新型コロナウイルス災禍に伴う人流抑制の緩和の動きが世界中に認められるようになってきていることから、博士学生主任指導数について令和5年度以降の増加が期待される。

- 助教は、教授または准教授とともに助教の各指導数に認められる貢献を積み重ねてきている。

## 2) 教育改善に関する事項

教育改善に関し、理工学部各部門の教員は、次のような取り組み、実践を行っている。

### 【数理部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- 対面のほか、オンデマンドや録画配信など授業内容に応じて様々な方法で授業を行った。(准教授)
- 就学上の困難を申し出た学生に対し、キャンパスソーシャルワーカーと連携してサポートを行った。(教授)
- オフィスアワーに多くの学生が質問に訪れ、彼らに丁寧な個別指導を行った。(准教授)
- 講義ノートを事前に配布して、学生が予習と復習ができるようにした。(講師)
- Microsoft 365 の Teams を活用した。(講師)

### 【情報部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- 授業時間外の課題などを整備し、学生の予習復習の利便性を高めた。(教授)
- 一人で担当した授業では、Microsoft Teams を活用して、毎週定期的に講義ビデオや授業資料の教材を提供するとともに、課題の提出受付、履修者への連絡および質疑応答を行った。ツールを活用した質疑応答や共同作業も実施しており、ICT を活用したオンライン授業が実施できた。(教授)
- 補講用の e-Learning 教材を、学生の予習・復習用に利用できるように整備した。(教授)
- 授業はもちろんのこと、ゼミや学生指導でも Zoom を活用したオンライン化を行った。(准教授)
- オンラインと対面のハイブリッド方式で、配信動画は録画して後からも随時閲覧できるようにした。(准教授)
- 大学院科目では、資料を全て英語化するとともに、課題の整理を行った。(教授)
- 毎回の授業で小試験と課題を出した。小試験と課題の提出には Moodle を用い、提出と採点結果の返却を効率化した。(准教授)
- 必須課題と挑戦課題を設けるなど、学生個人の能力に応じた取り組みができる構成もうまく機能している。成績不振者を呼び出して対面での質疑応答を充実させるなど、きめ細かな対応をとった。(教授)

- 地元企業および佐賀県と協力した大学院講義。（教授）
- オンラインと対面授業を組み合わせ、授業時間外学習をより促すようにした。（教授）
- 改良型ハイフレックス方式を活用した授業改善活動。（准教授）
- ハイブリッド授業を用いて学生が対面・オンラインの受講形態を自由に選べるようにした。（准教授）
- プログラミングコンテスト。（教授、助教）
- 「大福帳方式」を用いた学生とのコミュニケーション促進を図った。（准教授）

#### 【化学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- 学生のモチベーションを上げるために、講義の始まりで今回学ぶべき項目、講義の終わりで次回の予告を説明する。また、課題レポートの解答例を解説する時間をできるだけ増やす。（教授）
- なるべく略さないように、くどいくらい丁寧に話す。（教授）
- 知識教授の点である程度やむをえないが、アクティブラーニングを視野に学生からの発問を増やす工夫を考えたい。（教授）
- 次学期も今学期のような良好な学生からの評価が得られるように、学生とコミュニケーションをとりながら、工夫を続けて丁寧に講義を行いたい。（教授）
- 毎回の授業でも学生に対してシラバスを活用して効率的・効果的に予習・復習を行うように促す。（教授）
- 相談しやすい雰囲気を授業中にとる。考える時間を増やす。（准教授）
- 質問に来ることを恐れずに、質問に来ることを促す仕組みを作る。（准教授）
- 昨年度の動画を参考資料として受講生に紹介し、学生が予習・復習できるように努めた。（准教授）
- 講義3回に1回はユーモアある説明を講義に盛り込む。（准教授）
- 学生自身が問題を解く時間を増やすようにするとともに、基礎的なことを理解していない学生もいることを考慮して、基本的なことも含めながら丁寧に説明するように努める。（助教）

#### 【物理学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- LMS を活用している。（教授）
- eラーニングを実施した。（教授、准教授）
- 担当で教科書を共同執筆し出版した。（教授、准教授）
- ・補助教材、テキストの作成と配布。（教授）
- ・毎回の演習、小テストの実施。（教授、准教授）
- ・学生からの学習相談を実施している。（准教授）

- ・ 授業用動画の作成と整理。（教授）
- ・ 共著者として博士学生の論文投稿を支援。（准教授）
- ・ 板書やスライドの内容の事前配布。（准教授）

#### 【機械工学部門】

令和4年度は、前後学期とも基本対面授業の措置が取られた。教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- ・ 主な講義は対面で行い、これまでのオンラインと比べ学生に対する対応を細やかにすることができた。
- ・ 対面を主とした授業を実施するとともに、感染者や濃厚接触者にも対応して対面とリモートのハイブリッド授業を実施した。また、中間試験、定期試験及び再試験は対面で実施した。
- ・ 講義においては、実際の工学的応用例との関連を示すなどして、受講者の授業への関心を喚起するように努めた。
- ・ 各演習や資料等についての質問に対しては、その都度、受講者全員に対し説明を行った。また、中間試験と定期試験後にそれらの解法についての説明を行った。
- ・ パワーポイントを用いた講義では、重要な項目については、その重要度に応じて文字の色等を変えることで視覚的に訴えた。また、適宜ビデオや映像などを用いることで重要な点を明確にした。
- ・ 講義の最後に、その日の講義中で最も重要な項目について小テストを行った。また、次の講義の冒頭に、前回行った小テストを返却し、解答を示しながら解説を行った。
- ・ 前回の講義に欠席した受講生への講義内容の周知と、前回の講義に出席した受講生への復習を目的として、小テストの返却中に前回の講義で用いたパワーポイントを自動的に映写した。
- ・ 対面とオンデマンドを併用して授業を実施した。オンデマンドによる説明動画の視聴も併用することで、実験場所での測定時間と説明を短縮したが、十分に実験の経験をできるように配慮した。新型コロナウイルス対応のため、実験場所でのテーブル数を増やして学生同士の間隔を確保した。
- ・ 対面、オンライン両方の実習形態に対処できる体制を作り、実際にコロナ感染者や濃厚接触者がいたが柔軟に対応し、実習の質をあまり下げずに教育することができた。
- ・ 昨年度に続き、新型コロナウイルス感染症対策に十分留意して、対面で講義を行った。
- ・ Microsoft Teams に視聴資料を提示し、事前に実験内容を解説した。班を二つに分け、実験講義やプレゼンテーションでの蜜を避けた。
- ・ 関連事項の説明や課題の提示を、実験説明の時間のほか、Microsoft Teams を援用して実施した。Microsoft Teams で実験結果を共有することで、講義への理解を深

めさせた。

- Microsoft Teams の課題経由で提出されたレポートは、考察・結論の妥当性・独自性を、主に評価した。レポートを確認し、内容の修正が必要な場合、該当箇所を Microsoft Teams ・課題のフィードバックに記載し、提示した締切日までに再提出させた。
- 個別に提示した実験課題に関するプレゼンテーションは、対面で行い、情報発信能力、コミュニケーション能力を養い、実験の発展的な理解に努めさせた。
- 感染症対策としては、手指消毒やマスク着用の注意喚起以外に、着座間隔に配慮して受講生、一人一人の席を、Microsoft Teams を使って、事前にアナウンスした。
- 受講学生が主体的な学習に取り組めるよう、講義の事前資料配布や講義後の演習課題提示・提出、定期試験の解説など、Microsoft Teams と Forms を使って行った。授業とも資料を更新し更に充実させた。
- 講義に黒板、プロジェクター等を十分使って講義の内容をシラバス通り学生に説明した。必要なプリント及び授業ノートを学生に完全に配布した。
- 理工学部 1 年次における必修科目であり、いずれのコースに進む学生にとっても、2 年次以降の各基礎科目への土台となる講義であるため、その重要性は極めて高い科目である。全ての学生が本科目の要求を満たす学力を身につけられるよう配慮した。
- 毎週実施する演習課題についても、一昨年度導入した e ラーニングにより、効果的な反復学習の機会を与えることができた。
- 金属材料を中心と機械材料の基礎について講義するとともに、主に機械材料の概要と環境との関わり、環境問題を考慮した材料評価へのアプローチや現代の工学が抱える課題について平易に解説した。
- 創造工学入門ならびに表面工学特論では、アクティブラーニングを取り入れ、履修者が能動的に内容を理解できるように工夫を施した。
- これまでに蓄積したオンライン講義の利点を活用し、教育効果に配慮しながら対面授業の両立に努めた。対面で実施した実習系授業では感染対策のため、少人数ごとに出席させるなどの工夫を行った。講義では、毎回のレポート課題と解説を充実させて、学習の深化に努めた。
- 原則対面形式とし、状況に応じてオンラインを併用したハイブリッド形式での実施した。また、三密を避けた対面での作業、理解度を高めるための Forms を用いたレポート提出、インカム、ヘッドセットを用いたライブ授業を行なった。
- 機械工学の専門科目との関連性について説明を加え、学生の学習意欲の向上に努めた。
- 今年度は完全に対面授業で実施したが、新型コロナに関わる学生の欠席を考慮し、リモートでも参加できるハイブリッド授業やオンデマンド授業の対応も行った。ま

た、共通科目を担当する教員間で協力して授業に使う資料を e ラーニングで作成した。

- Microsoft Teams の画面共有機能を用いて 学生がつまづいている箇所を共有し、教員側の計算機で同様のつまづきを再現することにより 学生に納得してもらうことができた。
- 授業の後半では、地球環境問題の中から自分が興味を持ったトピックスを選ばせ、他学部や他学科の学生も含んだ 15 グループを作った。チームワーク力の修得を念頭において、各グループ内で課題について議論させ、共同でプレゼンテーションの準備と発表をさせた
- 予習を促し、授業を円滑に進めるために、シラバスを配布した。学習効果を高めるために、適宜に演習を課し、期末試験のほかに中間試験等を実施した。
- 前回の演習科目解答の説明を講義の冒頭で説明し、講義内容の理解に努めた。
- 事前課題を Microsoft Teams 経由で提示し、Microsoft Teams の課題経由で提出されたレポートは、考察・結論の妥当性・独自性を、主に評価した。また、プレゼンテーションでは、情報発信能力、コミュニケーション能力を養い、実験の発展的な理解に努めさせた。
- オンラインシラバスを通じて、学習到達目標や成績評価基準を周知した。また、講義毎に課題を提示し、次の講義の冒頭、解答と解説を行い、講義内容への理解を促した。
- 対面授業の実施は。オンラインのときよりも随時学生の反応を見て補足説明もでき、学習効果を高めることができた。
- 講義の説明や必要な書類を履修者全員に配布し、毎回の講義後に学生意見を集めた。
- 既習の内容との関連性を示しつつ、より専門性の高い内容を実用問題への応用を交えながら講義した。また、自己学習を促すため、ほぼ毎回の講義時に、時間外学習としての演習を課した。
- 基礎知識のみならず、多少専門性の高い話題についても、難解にならないよう心がけながら可能な限り紹介した。
- 機構学ならびに機械要素設計製図では、設計製図にかかわる基礎的知識を習得できるように工夫を施した。
- オンライン方式では学生も気軽に質問できるようで、Microsoft Teams のチャット機能などを用いて頻繁に質疑対応を行うことができた。また、講義中に学生の反応を見ながら、理解度に応じて補足の説明を行うなど理解の深化に努めた。さらに机上の学問の応用法について理解できるよう配慮した。

#### 【電気電子工学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- 受講生が多数いたため、自学用の教材を提供し、対面とオンラインのハイブリッド

授業にして対応した。(教授)

- 講義資料の改善や Microsoft Teams の利用などによって、受講生が学びやすくなるよう努めた。(教授)
- 対面授業においても、Microsoft Teams を用いてオンラインでの受講ができるようにした。(教授)
- 復習ならびに欠席者に対応することを目的に、対面授業後にオンデマンド講義動画を活用した。(教授、准教授)
- 講義時間中に能動的に演習に取り組む工夫を行い、学生の理解度向上に努めた。(教授)
- オンラインコンテンツを復習用に提供した。(教授)
- 事前に講義ビデオを視聴しノートを作成させることで、自学習時間を確保した。(准教授)
- 授業内容の深い理解に基づいて授業を改善することが最も重要と考え、日々参考資料などを読んで授業内容の改善に取り組んだ。(准教授)
- 講義内容に関連した事例に対する学生の意見を収集し、次回の講義で紹介する形式を取った。(准教授)
- 質問箱を Forms で作り、学生が分からないところを重点的に説明した。(准教授)
- 解答後に正解が分かるような Forms によるクイズを作成した。(准教授)
- 講義内容に関連したタイムリーなトピックについて、詳細に授業を行った。(助教)

#### 【都市工学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている記載がある。令和3年度に引き続き、令和4年度でも新型コロナ災禍に対応するためのオンライン、またはオンライン+対面による講義の対応に臨んだ申告が認められる。また、新型コロナウイルス災禍における人流抑制緩和の動きが始まった年度にもあたり、研究・プロジェクト実践型教育 (Research Based Education : RBE または Project Based Learning : PBL) に臨んだ申告も認められるようになってきた。

- 設計演習の授業では、学期中に2、3回のプレゼンテーションを行う機会を設けた。また、大学院演習では、その成果を地域のギャラリーに展示し、従事者や一般市民等の具体的な利用者からフィードバックを得る機会を設けた。また、地域プロジェクトの一環として取り組んだ特別演習およびデザイン演習では、プロジェクトの報告会に際し審査委員から「評価は満点以上。地域に風穴を開けた」などの高い評価を得た。(教授、准教授)
- 卒研学生および修士学生の論文の内容について、学内公表のみならず学協会の公表のレベルにまで高めた。(教授、助教)
- インターンシップ科目を主担当し、新型コロナウイルス災禍から学生の心身を守り、科目を成立させた。(教授)

- オンラインコンテンツの充実と対面授業との併用を行った。ウェビナーの機能を利用して効率的に学生に課題を課し、採点まで行う作業ができた。さらに、授業評価を実施し、改善に取り組んだ。(教授、准教授)
- 修士学生を対象とした講義において、英語と日本語を併用した。留学生および日本人学生によるプレゼンテーションには英語のみの環境を許し、プレゼンテーション資料の作成、発表および質疑応答の機会を設けた。日本人学生を対象に、授業の理解度や英語のみで実施される授業を受けるために必要なサポートについてアンケート調査した。(准教授)
- 卒研学生の卒業後、または修士学生の修了後に求められる資格等の取得に関する説明と指導を担当し、年度の始めと中間におけるオリエンテーションなどを利用して相談、指導を行った。(准教授、講師)
- 設計演習科目において TA を採用し、より実践的な教育に取り組んだ。全員の演習課題を講義の都度チェックする科目の性質において TA は必須であり、学生の教育によく資するものであった。講義の時間帯のみならず自宅学習の時間帯をもフォローアップし、全員の設計課題の進捗を確認するとともに意見交換を行った。ウェビナーではそれぞれの作品に対しテキストによるコメントを共有することで履歴も残り、受講生の進捗向上に資する方法となった。(准教授)
- オフィスアワーを設けるほか、メール、オンラインまたは対面による面談などを通じて学生の相談に応じた。また、キャンパスソーシャルワーカーとのサポートミーティングや保護者との面談を通じ、学習に問題のある学生の対応を行った。(准教授、講師)

### 3) 教育研修・FDに関する事項

教育研修・FDについて、理工学部各部門の教員は次の活動を行っている。

#### 【数理部門】

- 部門内でのFD活動の他、理工学部FD講演会に参加した。また、情報セキュリティ講習、研究費不正防止に係る研修を修了した。

#### 【情報部門】

- 理工学部FD講演会
  - 佐賀大学版オンライン試験システムについて
  - 障害学生の学内支援体制について
  - みなし輸出管理及び研究インテグリティについて
- 全学教育機構FD
  - ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ
  - PROG 試験結果を踏まえたFD講演会

#### 【化学部門】

- 理工学部FD講演会「佐賀大学版オンライン試験システムについて」(教授、准教授、

助教)

- 理工学部 FD 講演会「令和 5 年度の科研費申請について」(教授、准教授、助教)
- 理工学部 FD 講演会「障害学生の学内支援体制について～キャンパスライフサポーター制度の開始にむけて～」(教授、准教授、助教)
- 理工学部 FD 講演会「理工学部 FD 講演会「みなし輸出管理及び研究インテグリティについて」(教授、准教授、助教)
- 理工学部 FD 講演会理工学部 FD 講演会「佐賀大学版オンライン試験システムについて」(教授、准教授、助教)
- 「公正な研究活動の推進に関する講演会」講師：日本学術振興会 学術システム研究センター 顧問 黒木登志夫 氏、演題：『研究不正を予防するための 1 2 の対策』(教授)
- 肥前セラミック研究センターFD・SD 研修会 「有田焼産業の持続可能性への取り組み」(教授)
- 総合分析実験センターセミナー「熱分析基礎セミナー」(准教授)
- 総合分析実験センターセミナー「データベース Reaxys 紹介セミナー」(准教授)

#### 【物理学部門】

- 全員が簡易版ティーチングポートフォリオ(TP)を作成しており、一部の教員が標準版 TP を作成している。
- 理工学部 F D 講演会に参加した(教授、准教授)。
- 大学が開催する FD 講演会に参加した(教授、准教授)。
- 韓国延世大学とのパートナーシッププログラムにおいて、大学院生向け講義を行うと共に参加者と学術交流を行った(准教授)。

#### 【機械工学部門】

- 部門内に設置した教務・JABEE グループによる JABEE 基準適合対応、学部および大学院の教務関連事項の検討。
- 学部 FD 講演会への参加。
- 大学 FD 講演会への参加。

#### 【電気電子工学部門】

- PROG 試験結果を踏まえた FD 講演会(教授)
- さがん国際フォーラム「グッデイは、なぜ DX に取り組んだか？」(教授)
- シンポジウム「佐賀県から始まる 日本の未来」(教授)
- みなし輸出管理及び研究インテグリティについて(教授、准教授)
- 研究力分析ツール SciVal の活用方法についての説明会(教授、准教授)
- 公正な研究活動推進講演会「研究不正を予防するための 1 2 の対策」(教授、准教授)
- 佐賀大学版オンライン試験システムについて(教授、准教授)
- 社会的インパクト評価の概念に関する説明会(教授)

- 女性研究者の公平な昇任昇格制度改善プロジェクト「研究環境のジェンダーパリティを目指して」(教授)
- 障害学生の学内支援体制について～キャンパスライフサポーター制度の開始にむけて～(教授、准教授)
- 生命保険業界におけるダイバーシティ推進とデータサイエンス ～ アフラックの取り組み事例(准教授)
- 総合分析実験センターの FD・SD セミナー「細胞外フラックスアナライザー XF Series 機器概要セミナー」への参加(准教授)
- 総合分析実験センターの FD・SD セミナー「病理学的解析法ワークフローのポイント」(准教授)
- 大学設置基準等の改正に係る説明会(教授)
- 日本学術会議九州・沖縄会議科学者懇談会・学術講演会(教授)
- 微細藻類バイオマス研究プロジェクト発表会(教授)
- 令和5年度科研費申請に向けて(教授、准教授)

#### 【都市工学部門】

- 理工学部 FD 講演会・【第1部】教育企画課「佐賀大学版オンライン試験システムについて」・【第2部】「令和5年度の科研費申請について」(教授、准教授)
- 理工学部 FD 講演会「障害学生の学内支援体制について～キャンパスライフサポーター制度の開始にむけて～」(教授、准教授)
- 理工学部 FD 講演会「みなし輸出管理及び研究インテグリティについて」(教授)
- 工学系高度人材育成コンソーシアム講演会(准教授)
- 令和4年度第1回佐賀大学さがん国際フォーラム(准教授)
- 社会的インパクトに関する説明会(准教授)
- 大学等における教育 FD 動画コンテンツの利用(准教授)
- 研究力分析ツール SciVal の活用方法についての説明会(教授、准教授)
- 令和4年度国立大学法人佐賀大学公正な研究活動の推進に関する講演会(教授、准教授)
- 大学設置基準等の改正に係る説明会(准教授)
- 令和4年度ダイバーシティ推進室シンポジウム「研究環境のジェンダーパリティを目指して」(准教授)
- 令和4年度日本学術会議九州・沖縄地区会議学術講演会・日韓国際シンポジウム(准教授)
- 令和4年度情報セキュリティ SD 講習会(准教授)
- 第29回佐賀大学簡易版ティーチングポートフォリオ更新ワークショップ(教授、准教授)
- Getting Publishing Workshops(准教授)

#### 4) オフィスアワーの設置と学生相談に関する事項

オフィスアワーの設置と学生の訪問については、理工学部内の全ての教員が行っている。部門ごとの相談内容やその対応については、以下のとおりである。

##### 【数理部門】

- 相談内容は学習方法や将来の進路に関するものが多い。（教授、准教授、講師）
- 質問内容は主に学生が自主的に学習している教科書の章末問題の解法であった。（准教授）

##### 【情報部門】

- LP を活用したチュータ指導
- チャットツールを用いたオンラインによる指導

##### 【化学部門】

- オフィスアワー以外の時間においても、教員は学生の訪問・相談に適宜対応している。（教授・准教授・助教）
- 学生からのメールによる相談についても対応している。（教授・准教授・助教）
- 毎学期毎に担当学生全員に対し、ラーニング・ポートフォリオを活用したチューター面談を実施している。（教授・准教授・助教）
- 学生の訪問・相談は、コース主任や教務委員、教育プログラム委員長、就職担当教員などに対するものが多い。（教授・准教授）
- 授業に関する質問が最も多く、その他履修上の相談や就職に関する相談・報告、進路等の相談など多岐にわたる。（教授・准教授・助教）

##### 【物理学部門】

- オフィスアワーにおける学生の訪問は少ない。多くの場合講義後や、オフィスアワーに限定されない時間帯で訪問・相談が行われている。
- 授業担当教員が学習方法や学習内容の相談に対応しているほか、成績不振者をコース全体で把握し、必要に応じてチューターが学生や保護者と面談して、学生の学習状況の改善をはかる努力を行っている。

##### 【機械工学部門】

- 相談内容のほとんどは就職・進路相談と学修相談についてであるが、一部の学生から日常生活に関する相談もある。

##### 【電気電子工学部門】

- 相談内容は授業科目や試験関連、実験レポートの質問に関するものが多い。休学等の在籍についての相談もある。（教授、准教授、助教）

##### 【都市工学部門】

- 相談内容は講義の取り組みに関する質問を始め、進級および進路に関するものが多い。（教授、准教授）

- 研究室に所属の卒研学生、修士学生および博士学生について、主任指導教員が随時相談に応じている。(教授、准教授、講師、助教)
- 教職チューターによる学生面談を始め、過年度生や学生保証人との間の面談も随時行われている。
- 面談方法について、対面、電話、オンラインおよび資料送付等の手段が用いられ、可能な限り学生に寄り添えるように配慮されている。

## 5) 学生の受賞等

### 【情報部門】

- SICE 優秀学生賞 (指導教員：教授、准教授)
- 理工学部同窓会長賞 (指導教員：准教授)
- 菱実会賞 (指導教員：准教授)
- 九州経済産業局長賞 (指導教員：准教授)
- 国際会議 ITNG2022 Student Best Paper Award (指導教員：教授)

### 【化学部門】

- 第 59 回化学関連支部合同九州大会 若手研究者奨励賞 2 件 (指導教員：教授)
- 九州錯体化学懇談会第 264 回例会優秀ポスター発表賞 (指導教員：教授)
- 化学工学会九州支部優秀ポスター賞 (指導教員：准教授)
- 化学工学会優秀学生賞 (指導教員：准教授)
- The 12th Joint Seminar between Saga University and Liaoning University Presentation Award 2 件 (指導教員：教授、准教授)
- 化学工学会九州支部 優秀ポスター賞 (指導教員：准教授)
- 日本ポーラログラフ学会学生優秀発表賞 (指導教員：教授)
- 日本分析化学会九州支部九州分析化学奨励賞 (指導教員：教授)

### 【機械工学部門】

- 日本機械学会 畠山賞
- 日本機械学会 三浦賞
- 日本設計工学会 武藤栄次賞
- 計測自動制御学会 優秀学生賞
- 第 26 回国際アコースティック・エミッションシンポジウム 新進賞
- 日本材料学会九州支部第 9 回学術講演会 JSMS Kyushu、 Young Researcher Award 2022
- 計測展 2022 OSAKA「学生ポスター展示 / 学生ライトニングトーク」 優秀賞
- 自動車技術会 大学院研究奨励賞

### 【電気電子工学部門】

- 2022 年度日本表面真空学会九州支部学術講演会 学生講演奨励賞 (指導教員：教授)
- 2022 年度応用物理学会九州支部学術講演会 発表奨励賞 (指導教員：教授)

- 映像情報メディア学会優秀研究発表賞（指導教員：教授）
- Dr. Fatema Rashid Best Paper Award in ICPRSET2022（指導教員：教授）
- 電子情報通信学会九州支部連合大会講演奨励賞（指導教員：教授）
- 映像情報メディア学会放送技術研究会学生発表部門 優秀賞（指導教員：教授、准教授）
- Dr. Fatema Rashid Best Paper Award in ECCE2023（指導教員：教授）
- 2022年 IEEE 福岡支部発表奨励賞（指導教員：教授）
- 電気学会九州支部長賞（指導教員：准教授）
- 計測自動制御学会計測部門・電気学会計測研究会合同ポスターセッション優秀発表賞（指導教員：准教授）

#### 【都市工学部門】

- 令和4年度都市工学部門卒業論文審査会優秀賞（指導教員：教授、准教授）
- 令和4年度都市工学部門修士論文審査会優秀賞（指導教員：教授、准教授）
- 令和4年度土木学会西部支部研究発表会優秀講演者賞（指導教員：教授）
- 令和4年度日本建築学会九州支部長賞（指導教員：准教授）
- 令和4年度都市住宅学会九州支部賞（指導教員：准教授）
- 令和4年度地盤工学会九州支部優良学生賞（指導教員：教授）
- 令和4年度建築学会九州支部九州建築賞研究新人賞（指導教員：教授）
- 令和4年度長谷工住まいのデザインコンペ佳作（指導教員：教授）
- 令和4年度佐賀大学同窓会長賞（指導教員：教授）
- 令和4年度佐賀大学学長賞（指導教員：教授）
- 令和4年度第14回エイブル空間デザインコンペティション・エイブル賞（指導教員：准教授）

(2) 研究の領域

1) 著書、論文等の発表実績

過去5年間（2018.4.1～2023.3.31）の発著書、論文等の発表実績を表 B.2 に示す。

表 B.2 過去5年間（2018.4.1～2023.3.31）の発著書、論文等の発表実績平均値

学科	職 種	著書	論文総数		和文原著		英文原著	
				査読付		査読付		査読付
数理部門	教 授	0.00	4.50	4.25	0.25	0.25	4.25	4.00
	准教授 (含講師)	0.00	2.75	2.50	0.00	0.00	2.75	2.50
情報部門	教 授	1.57	15.57	15.00	1.00	0.43	14.57	14.57
	准教授 (含講師)	0.14	17.57	15.29	3.71	1.71	13.86	13.57
	助 教	0.00	5.67	5.67	0.00	0.00	5.67	5.67
化学部門	教 授	1.83	16.83	16.50	0.67	0.58	15.92	15.92
	准教授	1.00	14.50	13.00	1.50	0.00	13.00	13.00
	助 教	0.00	3.00	3.00	0.00	0.00	3.00	3.00
物理学部門	教 授	0.57	4.86	4.71	0.14	0.14	4.71	4.57
	准教授	0.40	74.40	54.20	0.00	0.00	74.40	54.20
機械工学部門	教 授	0.67	19.22	18.22	1.89	0.89	17.33	17.33
	准教授 (含講師)	0.33	10.25	6.92	3.08	0.50	7.17	6.42
	助 教	0.00	1.75	1.75	0.25	0.25	1.50	1.50
電気電子工学部 門	教 授	0.78	21.00	20.89	1.11	1.00	19.67	19.67
	准教授 (含講師)	0.22	7.22	7.22	1.67	1.56	5.67	5.67
	助 教	0.00	6.67	6.67	0.00	0.00	6.67	6.67
都市工学部門	教 授	0.22	18.78	16.00	6.11	3.22	12.67	12.67
	准教授 (含講師)	0.67	12.33	4.67	10.78	3.22	1.56	1.56
	助 教	0.50	15.50	5.00	9.50	1.00	6.00	4.00

#### 【数理部門】

- 教授および准教授・講師の研究活動は平均的に見て良好である。

#### 【情報部門】

- 教授、准教授ともに、活発に研究成果発表を行っている。原著論文は、英文での発表が主要となっている。
- 助教の研究活動は、教授・准教授に比べるとやや低調であるが、昨年度よりは改善がみられる。

#### 【化学部門】

- 教授の研究活動は良好である。従来よりも大学運営の負担増加にも関わらずに平均して良好な研究活動が維持されている。審査付論文に約 16 報（5 年間）を報告している。
- 准教授の研究活動は良好である。准教授の教育負担も確実に増加しているが審査付論文に約 13 報（5 年間）を報告している。
- 助教の研究活動は活発とは言えない状況であり、査付論文に約 3 報（5 年間）を報告している。

いずれの教員も審査付国際論文への投稿が大部分である。和文の論文は学会などから依頼された総説類と推察され、和文論文でも国内学会にはそれなりの貢献を果たしていると考えられる。昨年度と同様に本年度も准教授の論文数が教授よりも高く、研究活動が高いレベルで維持されていることが判断できる。今後の化学部門の発展のためには助教の研究活性化が必要と思われる。

#### 【物理学部門】

- 教授の発表実績はやや個人差があるものの、平均として高い水準にある。
- 准教授の発表実績は個人差があるが、平均として高い水準にある。准教授 1 名の大型研究の論文（300 編以上）が論文数を押し上げている。
- ほとんどの論文が英文で書かれ、査読付きである。研究に関しての国際化は進んでいる。

#### 【機械工学部門】

- 教授の研究活動は、概ね良好な研究活動が継続的に行われていると評価できる。
- 准教授の研究活動についても、概ね良好な研究活動が行われていると評価できる。
- 助教の研究活動についても、概ね良好な研究活動が行われていると評価できる。

#### 【電気電子工学部門】

- 教授の研究活動は、博士後期課程学生の博士号認定資格を維持している。論文総数の平均は約 4.2 編／年であり、その 93.7%は英文論文であり、また英文論文のすべてが査読付きの業績であることから、質の高い研究成果を発表していると評価できる。
- 准教授の研究活動は博士前期課程学生の修士号認定資格を維持している。論文総数

の平均は約 1.4 編／年である。教員により論文の発表実績のばらつきが大きい。

- 助教の研究活動は博士前期課程学生の指導資格を概ね維持している。論文総数の平均は約 1.3 編／年であり、すべて査読付きであるとともに、全てが英語原著論文である。

#### 【都市工学部門】

- 教授の研究活動について、査読付き論文において成果を挙げている。なお、例年の傾向として論文数の個人差がある。①研究分野の特性による；②博士後期課程の指導学生数が多い教員に査読付き論文数が集中する傾向にある；③教員不補充と新カリキュラムの施行による教育の領域における負担の増加を始め、組織運営の領域に関する負担の増加、などによる影響が考えられる。
- 准教授・講師の研究活動は著書数および査読付き和文原著で教授を上回っている。教授同様、准教授・講師の論文数において個人差が大きい。
- 助教の研究活動は、現状 2 名（内 1 名は令和 3 年度後学期に着任のプロジェクト助教）のみにより、部門の傾向としてのコメントは控える。
- 全体として、令和 3 年度に比べ令和 4 年度における各項目の数は増加傾向を示したことを強調したい。「修士・博士学生または留学生の獲得＝論文数の増加」は単純相関の関係として捉えられそうである。職位によらず恒常的な修士・博士学生または留学生の獲得を目指すことが、研究力の持続発展に繋がる鍵といえる。

## 2) 共同研究などに関する活動実績

#### 【数理部門】

- 外国人研究者とオンラインで研究打ち合わせを行った。（准教授）
- 国際共同研究による成果を公開した。（教授）
- 国内の他大学の研究者と共同研究を行った。（講師）

#### 【情報部門】

- 佐賀県との受託研究（教授、准教授）
- 国立研究開発法人科学技術振興機構との受託研究（准教授）
- 国立研究開発法人国立環境研究所との受託研究（教授）
- 国立研究開発法人情報通信研究機構との共同研究（教授）
- 地元企業との共同研究（教授、准教授）
- 民間企業との共同研究（准教授）
- 理工学部重点プロジェクト（准教授）
- 他学部との共同研究（教授）
- 他大学・研究機関との共同研究（教授、准教授）

#### 【化学部門】

- 科学研究費補助金に新規 5 件が採択されている。（研究代表者のみ）（教授・准教授）
- 民間企業や産業技術総合研究所等との共同・受託研究や寄附金が 12 件ある。

- 佐賀市からの受託研究（教授）
- 国立研究開発法人科学技術振興機構からの受託研究（教授）
- 国立研究開発法人日本原子力研究開発との共同研究（教授）
- 佐賀県畜産試験場との共同研究（教授）
- 国立研究開発法人 産業技術総合研究所との共同研究（准教授）
- 民間企業との共同研究（教授、准教授、助教）
- ガジャ・マダ大学（教授）
- ドレスデン工科大学（教授）
- 遼寧大学（教授）
- オクラホマ州立大学（教授、准教授）
- アルメリア大学（准教授）

#### 【物理学部門】

- 福岡工業大学の教員等と共同研究（教授）
- 東京理科大学、日本大学、九州産業大学と共同研究（教授）
- 理化学研究所、弘前大学、NSRRC、九州大学工学部、熊本大学と共同研究（准教授）
- 日本学術振興会 二国間交流事業（韓国との共同研究）で国際ワークショップを開催、韓国研究者と研究交流（准教授）
- 九州大学、スイス、ポール・シェラー研究所と共同研究（准教授）
- 国立研究開発法人産業技術総合研究所と共同研究（教授）

#### 【機械工学部門】

- 国、独立法人、民間等からの受託研究（教授、准教授）
- 国内の大学からの受託研究（教授、准教授）
- 独立法人、民間との共同研究（教授、准教授、助教）
- 国内外の大学との共同研究（教授）
- 民間、財団法人等からの教育研究助成（教授、准教授、助教）

#### 【電気電子工学部門】

- 民間企業との共同研究（教授、准教授、助教）
- 佐賀県との共同事業（教授）
- 独立行政法人国際協力機構 ABE イニシアティブ受入（教授）
- 公益財団法人からの研究助成受入（教授、准教授）
- 国立研究開発法人日本原子力研究開発機構からの受託研究（助教）
- 国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構との共同研究（教授）

#### 【都市工学部門】

- 令和4年度科学研究費補助金・基盤研究（B）・研究代表者（教授）
- 令和4年度科学研究費補助金・国際共同研究加速化基金（B）・研究代表者（教授）
- 令和4年度科学研究費補助金・基盤研究（C）・研究代表者（教授、准教授）

- 令和4年度科学研究費補助金・基盤研究（B）・研究分担者（教授、助教）
- 令和4年度科学研究費補助金・基盤研究（C）・研究分担者（教授）
- 令和4年度佐賀県有明海沿岸道路整備事務所受託研究・研究代表者（教授）
- 令和4年度佐賀県有明海沿岸道路整備事務所受託研究・研究分担者（教授）
- 佐賀県建設技術支援機構・受託研究（教授）
- 佐賀県・受託研究（准教授、助教）
- 唐津市・受託研究（教授）
- 佐賀市・受託研究（教授）
- 佐賀県 TSUNAGI プロジェクト・研究代表者（准教授）
- 令和4年度九州地域づくり協会調査研究助成・研究代表者（教授）
- 令和4年度九州地方計画協会・研究代表者（教授）
- 令和4年度河川整備基金助成事業・研究代表者（教授）
- 協和製作所・共同研究（教授）
- テノックス九州・共同研究（教授）
- 西松建設・共同研究（教授）
- 志村製材・海野建設・山口産業・テツシンデザイン・yHa architects・共同研究（准教授）

### 3) 受賞等の実績

教員の指導による学生の受賞等は、B. (1) の 5) に記載している。

#### 【情報部門】

- 35th International Conference on Computer Applications in Industry and Engineering (CAINE 2022) Best Paper Award（教授）
- GCA Best Paper Award（准教授）
- 電子情報通信学会通信ソサイエティ功労顕彰状（教授）

#### 【化学部門】

- 日本イオン交換学会学会賞（教授）

#### 【機械工学部門】

- 日本冷凍空調学会 学術賞（准教授）
- 計測自動制御学会論文賞 蓮沼賞（教授）
- 日本計算力学連合 The JACM Computational Mechanics Award（教授）
- 日本材料学会九州支部 Professor Award 2022（准教授）
- 日本機械学会 計算力学部門 業績賞（教授）

#### 【電気電子工学部門】

- 英国物理学会 IOP Trusted Reviewer Status 受賞（教授）
- 第52回日本臨床神経生理学会学術大会 優秀演題賞（教授）
- Dr. Fatema Rashid Best Paper Award in ICPRSET2022（教授）

- Dr. Fatema Rashid Best Paper Award in ECCE2023 (教授)
- 令和5年電気学会C部門 技術委員会奨励賞 (准教授)

#### 【都市工学部門】

- 令和4年度日本水環境学会創立50周年記念功労賞 (教授)
- 令和4年度土木学会西部支部・技術賞 (教授)
- 令和4年度グッドデザイン賞 (准教授)
- 令和4年度ランドスケープコンサルタンツ協会賞・特別賞 (准教授)
- 令和4年度JIA日本建築家協会 優秀建築選 (准教授)
- 令和4年度日本建築学会・作品選集2023 (准教授)
- 国連ハビタット・アジア景観賞 (教授)

### (3) 国際・社会貢献の領域

#### 1) 国際交流実績

##### 【数理部門】

- 国際研究集会での招待講演を3件行った。(教授)
- オンラインにより国際的な研究活動を行った。(講師)

##### 【情報部門】

- 国際会議委員 (教授、准教授)
- インドネシア国立マラン大学との連携事業 (准教授)

##### 【化学部門】

- カリマンタン工科大学との①JSPS 二国間共同事業関連議論 ②JSPS 二国間共同事業・共同研究実験結果の議論 (教授)
- カリマンタン工科大学環境地球科学部主催の国際セミナーにおいて依頼講演 (教授)
- スラバヤ工科大学化学科主催の国際セミナーにおいて招待講演 (教授)
- メキシコからの非常勤博士研究員の受入 (教授)
- チェコ科学アカデミー 有機生化学研究所からの非常勤博士研究員の受入 (教授)
- インドネシアからの学生の受入 (教授)
- ネパールからの学生の受入 (教授)
- 韓国からの学生の受入 (教授)
- ドイツからの学生の受入 (教授)
- 遼寧大学との国際パートナーシッププログラム (教授)
- ドレスデン工科大学との共著論文 (教授)
- 遼寧大学との共著論文 (教授)
- オクラホマ州立大学との共著論文 (教授、准教授)
- リール大学との共著論文 (教授)

##### 【物理学部門】

- 理工学研究科国際パートナーシップ開催（教授、准教授）
- 韓国から1名の研究者を受入（准教授）
- 韓国開催の国際シンポジウムで招待講演（准教授）
- 二国間交流事業への参加（准教授）

#### 【機械工学部門】

- 国際学会、会議の運営委員、実行委員など（教授）
- 国外研究者の受け入れ（教授）
- 留学生の受け入れ（教授、准教授）
- 国際会議における招待講演、発表等（教授、准教授、助教）
- 国際パートナーシップ教育プログラムによる学生交流（教授）

#### 【電気電子工学部門】

- 国際パートナーシップ教育プログラム（教授、准教授）
- 理工学部客員研究員（国外研究者）受入（教授）
- 国費留学生受入（教授）
- ABE イニシアティブ留学生受入（教授）
- 米国、中国等との共同研究（教授）
- 国際共著論文出版（教授）
- 佐賀大学大学院理工学研究科国際パートナーシップ教育プログラム（教授）
- STEPs 海外研修（教授）
- 国外研究者の受け入れ（教授）
- マラン国立大学とのダブル・ディグリープログラムの検討（教授）
- 28th International Symposium on Artificial Life and Robotics（教授）
- 2021 MRS Fall Meeting, "Diamond Field-Effect Transistors"（教授）
- Gaseous Electronics Conference 2023 / International Conference on Reactive Plasma 11（教授）
- The 43rd International Symposium on Dry Process (DPS2022)（教授）
- 2022 Asia-Pacific Microwave Conference (APMC2022) 参加（教授）
- CUET webinar（教授）
- Int. Conf. Physics-2022（教授）
- The 7th Asian Applied Physics Conference (Asian-APC)（教授）
- 33rd International Photovoltaic Science and Engineering Conference (PVSEC-33)（教授）
- 9th Malaysia-Japan Photovoltaics Workshop (MJPVW2022)（教授）
- IEEE IM09 Committee Chair（准教授）
- IEEE 論文誌査読委員

#### 【都市工学部門】

- 国際ジャーナル誌 Journal of Environmental Engineering and Science および American Journal of Science, Engineering and Technology・編集委員（教授）
- 国際ジャーナル誌「Lowland Technology International」(Crossref)・編集委員長（教授）
- JICA・SDGs グローバルリーダーにおける1名のアフリカ人留学生を博士後期課程に受け入れ、指導中（教授）
- EPGA・短期インターン研修「Asian を対象とした国際協働教育プログラム～低平地都市における社会資本の開発と管理～」の実施（講師、教授、准教授）
- 佐賀大学国際交流推進センター・戦略的パートナーシッププログラムの実施（講師、教授）
- 在来知歴史学国際シンポジウムの主宰（教授、准教授）
- タイ・カセサート大学との間の新たな共同研究の締結に関する協議（准教授）
- 建築学会九州支部日韓シンポジウムの主宰（教授、准教授、助教）
- 日本・チュニジア・イタリア国際セミナーの主宰（教授、准教授、講師）
- 環アジア国際セミナー（オランダ・アイントホーフエン工科大学、オーストリア・ウィーン工科大学、タイ・チェンマイ大学、タイ・カセサート大学）の主宰（教授、准教授、助教）
- JASSO・2022 年度海外留学支援制度の派遣・受入の採択と実施（教授、准教授、助教）
- 科学研究費・国際共同加速化基金（B）の採択と実施（教授、助教）
- オーストリア・ウィーン工科大学日澳科学交流センター（JASEC）との間の共同国際ワークショップの実施（教授、准教授、助教）
- 中国・浙江大学城市学院「Second China (Yiwu) International Conference on Green Building」・基調講演（教授）
- 日瑞建築文化協会・在日スイス大使館共催「スイス・建築・日本建築トークイベント VOL-III 「DOORS」」・基調講演およびディスカッション（准教授）

## 2) 社会貢献実績

### 【数理部門】

- 論文査読を行った。（教授）
- アメリカ数学会からのレビュー依頼に応じた。（教授）
- ジョイントセミナーで講演した。（准教授）
- オープンキャンパスで模擬授業を行った。（教授）
- 日本数学会の委員を務めている。（教授）
- 大学・高校入試連絡会で講師を務めた。（教授）

### 【情報部門】

- 学会各種委員（教授、准教授）

- 学会論文査読委員（教授、准教授）
- 国立研究機関関連委員（教授）
- 佐賀県の各種委員・アドバイザー（教授、准教授）
- 行政関連委員（教授）
- ジョイントセミナー（教授、准教授）
- スーパーサイエンスハイスクール講師（准教授）
- 文部科学省 ICT 利活用教育アドバイザー（教授）

#### 【化学部門】

- 学会等の論文査読委員（教授、准教授、助教）
- 致遠館高等学校スーパーサイエンスハイスクール事業「課題研究指導」（教授、准教授）
- 2022 年度佐賀大学「科学へのとびら」講演（教授）
- 外部人材を活用した小学校における科学教室（佐賀県内 12 小学校）（准教授）
- 令和 4 年度佐賀県高等学校理科教育研究大会 実習指導（教授）
- SAGA ものすごフェスタ 8 参加（教授）
- 肥前セラミック研究所 講師（准教授）
- $\phi$   $\chi$   $\beta$  セミナー 講師（准教授）
- CIREn レアメタル回収研究分科会令和 4 年度講演会 講師（教授）
- 2022 年度「工学系高度人材育成コンソーシアム佐賀」事業 企画・運営（教授）
- 第 53 回化学工学の基礎講習会講師（教授）
- 佐賀医師会立看護専門学校「生化学」非常勤講師（教授）
- 2022 年度佐賀市学校適応指導教室「くすの実」理科教室 生徒指導（教授）
- 佐賀県理科・化学教育懇談会 運営（教授、准教授）
- 日本分光学会九州支部 支部長（教授）
- ARITA でリケフェス プチプチ！コロコロ！癒しセンサリーボトル 講師（教授）
- 肥前地区キャリア教育プログラム 企業説明会、工場見学、講演会（教授）
- A-STEP 審査委員（教授）
- 佐賀市エコプラザ運営委員会 委員（教授）
- 佐賀市環境審議会 委員（教授）
- CIREn 評議会 委員（教授）
- 第 25 回「企業と大学・高専の人材育成懇談会」参加（教授）
- 第 44 回全国都市清掃研究発表会 座長（教授）
- Editorial Board of Journal of Molecular Liquids, Elsevier, Editorial Board（教授）
- Associate Editor, Bulletin of the Chemical Society of Japan, Associate Editor（教授）

- Japanese Molecular Liquids Group, Chair (教授)
- 中性子課題審査分科会委員 分科会委員 (教授)
- 九州シンクロトロン光研究センター県有ビームライン課題評価委員 評価委員 (教授)
- 九州ファインセラミックス・テクノフォーラム 運営委員 (教授)
- 佐賀県窯業技術センター研究評価委員 評価委員 (教授)
- 日本技術者教育認定機構 審査員 (教授)
- 再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム(CIREn) レアメタル回収分科会副座長 (教授)
- 九州錯体化学懇談会 事務局 (教授)
- 日本化学会九州支部化学教育協議会 幹事 (教授)

#### 【物理学部門】

- 論文査読委員 (教授、准教授)
- SSH 大学研修 (致遠館高校) を担当 (准教授)
- 佐賀大学教育学部附属中学校育友会が開催する授業を担当 (教授)
- 全学2科目、学部1科目の授業開放 (教授)
- 日本中間子科学会会誌副編集長 (准教授)
- 研究課題審査委員 (理化学研究所) (准教授)
- 指定管理者選定委員会委員 (佐賀県) (准教授)
- 佐賀県と佐賀大学の共催イベントへの参画と情報発信 (准教授)
- 科学のとびら委員として活動 (准教授)
- 全国の理学実験系修士課程学生向けセミナーの講師 (准教授)

#### 【機械工学部門】

- 学会理事 (教授)
- 学会支部理事 (教授)
- 学会評議員 (教授、准教授)
- 学会副会長 (教授)
- 学会部門長 (教授、准教授)
- 学会副部門長 (教授)
- 学会商議員・運営委員 (教授)
- 論文校閲委員・編集委員・運営委員 (教授、准教授、助教)
- 学会九州支部理事・副支部長・評議員・商議員・常議員・幹事など (教授、准教授)
- 研究会会長・幹事・顧問など (教授、准教授)
- 学会開催の実行委員・運営委員など (教授、准教授、助教)
- 県審議会・連携会議委員会委員 (教授)
- 県公益財団法人評議員 (教授)
- 独立行政法人委員 (教授)

- 放送大学の講師（教授）
- ジョイントセミナー（教授）
- スーパーサイエンスハイスクールの講師（准教授）
- 科学へのとびら（准教授）
- 佐賀県ロボット研究会（准教授）
- 地域企業技術相談・勉強会（准教授）
- 機構相談員（教授）

#### 【電気電子工学部門】

- 佐賀県スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員（教授）
- ダイバーシティ入門講座付き実験体験会（准教授）
- 佐賀県立致遠館高等学校 SSH 課題研究「Specialized Field Seminar」（教授）
- 令和4年度 高度技術研修ものづくり技術者育成講座電気電子コース（准教授）
- 大学・高専合同リケフェス 2022（准教授）
- 令和4年度ものづくり技術者育成講座（准教授）
- 九州パワーアカデミー教育部会（准教授）
- 2022 ロボットアイデア甲子園（教授）
- 令和4年度佐賀県工業系高等学校 第31回生徒学習成果発表大会（教授）
- 佐賀大学の授業を受けてみよう（教授）
- 地域連携型佐賀大学公開講座（有田町）（教授）
- 第55回サイエンスカフェ in SAGA（教授）
- 科学技術専門家ネットワーク専門調査員（教授）
- 九州経済産業局創業支援等事業計画認定評価委員会委員長（教授）
- 電気学会九州支部役員（准教授）
- 佐賀工業高等学校評議員評議員（教授）
- 表面真空学会九州支部長（教授）
- 佐賀県内企業訪問と技術相談委員（教授）
- 企業の課題と状況相談技術相談（教授）
- プラズマ核融合学会九州沖縄山口支部役員（教授）
- 電気学会論文委員会編集委員副査（教授）
- プラズマ・核融合学会九州・沖縄・山口支部支部長（教授）
- 半導体製造装置企業からの技術相談アドバイス（教授）
- NISTEP 専門調査員科学技術に関する情報提供（教授）
- 電気学会計測技術委員会1号委員（准教授）
- MWE2022 大学展示会出展（教授）
- 佐賀県工業技術センター研究評価会議評価員（教授）
- 佐賀県工業技術センター評議会委員（教授）

- 佐賀県工業連合会工業大賞審査会審査委員長（教授）
- 再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム（CIREn）会長（教授）
- 佐賀県工業連合会工業大賞審査会審査委員長（教授）
- 応用物理学会九州支部会計幹事（教授）
- 応用物理学会九州支部理事（教授）
- 応用物理学会代議員（教授）
- 日本表面真空学会九州支部役員（教授）
- 33rd International Photovoltaic Science and Engineering Conference Technical Program Committee member（教授）

### 【都市工学部門】

#### ＜国・自治体等の委員＞

- 環境省「有明海・八代海総合調査評価委員会」委員（教授）
- 国土交通省「九州河川技術懇談会」委員（教授）
- 国土交通省「六角川学識者懇談会」委員（教授）
- 佐賀県「開発審査会委員会」委員長（教授）
- 佐賀県「川づくり委員会」学識者委員（教授）
- 日本学術振興会「科学研究費委員会」専門員（教授）
- 武雄市「新文化施設エリア整備基本計画策定業務公募型プロポーザル審査」審査員（准教授）
- 国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所「西九州自動車道道路法面施工技術検討委員会」委員（教授）
- 佐賀県「地域高規格道路環境影響評価委員会」委員（教授）
- 佐賀県「地域高規格道路軟弱地盤対策技術検討委員会」委員長（教授）
- 佐賀県「地域高規格道路軟弱地盤対策技術検討委員会」委員（教授）
- 佐賀県「佐賀県廃棄物処理施設専門委員会」委員（教授、講師）
- 国土交通省九州地方整備局「新技術活用評価会議」委員（教授）
- 国土交通省九州地方整備局「総合評価技術委員会」委員（教授）
- 国土交通省九州地方整備局「城原川ダム建設事業費等監理委員会」委員（教授）
- 佐賀県「総合評価技術委員会」委員（教授、准教授）
- 佐賀県教育庁「令和4年度学校安全総合支援事業推進委員会」災害安全担当推進委員長（教授）
- 国土交通省「緊急災害対策派遣ドクター」TEC-DOCTOR（教授）
- 佐賀県・災害対策アドバイザー（佐賀県版）TEC-DOCTOR（教授）
- 佐賀県「環境影響評価審査会」委員（准教授、講師）
- 佐賀県「伊岐佐ダム水質改善検討委員会」委員長（准教授）
- 福岡県「産業廃棄物審議会」委員（准教授）

- 佐賀県「建築審査会」委員（准教授）
- 佐賀県「都市計画審議会」会長（准教授）
- 佐賀県「学校安全総合支援事業推進委員会」副委員長（准教授）
- 佐賀県「大規模小売店舗立地審議会」委員（准教授）
- 佐賀県「公共事業評価監視委員会」委員（准教授）
- 佐賀市「都市再生協議会」会長（准教授）
- 佐賀市「佐賀市放置自転車等対策協議会」会長（准教授）
- 唐津市「都市計画マスタープラン等策定委員会」委員（准教授）
- 小城市「都市計画マスタープラン策定検討委員会」委員長（准教授）
- 上峰町「中心市街地活性化事業デザイン会議・有識者委員」委員長（准教授）
- 鹿島市「都市計画審議会」副会長（准教授）
- 武雄市「立地適正化計画策定委員会」委員（准教授）
- 神埼市「北部丘陵土砂採取場跡地利活用検討委員会」委員長（准教授）

#### <学協会の委員>

- 日本建築学会特別調査委員会「ウイズ／アフターコロナに適應する建築・都市に関する特別調査委員会」幹事（准教授）
- 日本建築学会代議委員（准教授）
- 全国高等専門学校デザインコンペティション空間部門審査員（准教授）
- 地盤工学会九州支部商議員（教授）
- 地盤工学会九州支部佐賀地区連絡幹事（教授）
- 土木学会「第27回水シンポジウム2023 in さが」企画部会委員（教授）
- 土木学会技術推進機構「土木技術者資格委員会」委員（2級土木技術者資格試験Ⅱ部門主査）（教授）
- KABSE 論文集委員会委員（教授）
- KABSE 学生シンポジウム実行委員（教授）
- 土木学会「土木イメージアップ協議会」幹事長（講師）
- 空気調和・衛生工学会九州支部担当理事（教授）
- 日本都市計画学会九州支部幹事（准教授）

#### <研究活動>

- 佐賀大学 SDGs 研究プロジェクト研究所（研究代表者）（教授）
- 佐賀大学 SDGs 研究プロジェクト研究所（研究分担者）（教授、准教授）
- 佐賀県内地域防災研究連絡会議委員（教授、准教授）
- 低平地研究会幹事長（准教授）
- 低平地研究会「低平地防災特別部会」部会長（教授）
- 佐賀県・佐賀大学理工学部「再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム（CIREn）」・「建築等のビッグデータ利活用分科会」座長（准教授）

- ・ 低平地研究会「都市空間専門部会」部会長（准教授）
- ・ 軟弱地盤研究会会長（教授）

<学外における講演>

- ・ 汽水域研究会 2022 年（第 14 回）大会 招待講演（教授）
- ・ 鹿島市役所「有明海における栄養塩輸送に関する最新の調査結果」講演（教授）
- ・ 佐賀県建設技術支援機構「技術者向けの講演会・令和 4 年度第 2 回技術研修会」講師（教授）

#### (4) 組織運営の領域

##### 【数理部門】

- ・ 理工学部各種委員、部門内委員を担当した。（全教員）
- ・ 省エネ、省資源などの活動に積極的に関わった。（全教員）
- ・ 佐賀大学個別学力試験「数学」の問題作成、点検、採点を行った。（全教員）
- ・ 留学生に対して、オンラインなどを駆使し、現状で可能な最大限の対応をした。（講師）

##### 【情報部門】

- ・ 理工学部各種委員の担当（教授、准教授、助教）
- ・ 学部コース配属処理（助教）
- ・ 他部局併任（教授、准教授）
- ・ 全学各種委員の担当（教授、准教授）
- ・ 評価室員（教授）
- ・ 副学部長（教授）
- ・ 学長補佐（教授）
- ・ 数理・データサイエンス教育推進室員（教授）
- ・ 教学マネジメント推進室員（教授）
- ・ スマート化プロジェクト（教授）

##### 【化学部門】

- ・ 理工学部および先進健康科学研究科の各種委員の担当（全教員）
- ・ 評価室員（教授）
- ・ 肥前セラミック研究センター センター長（教授）
- ・ 肥前セラミック研究センター セラミックサイエンス研究部門長（教授）
- ・ 安全保障貿易管理アドバイザー（教授）
- ・ 理工学部機能物質化学科 JABEE 認定プログラム「機能材料化学コース」・理工学部理工学科 JABEE 認定プログラム「応用化学コース」プログラム責任者（教授）
- ・ 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（教授・准教授・助教）

上記のように、各種センター長をはじめとして各種全学委員会委員長などの要職も務め

ており、組織運営に大きく貢献している。

**【物理学部門】**

- 理工学部・理工学研究科各種委員の担当（教授、准教授）
- 部門内の各種委員の担当（教授、准教授）
- 全学委員会の委員を担当（教授）
- 学部入学試験出題委員（教授、准教授）
- 全学教育機構副部長（准教授）

**【機械工学部門】**

- 理工学部、理工学研究科、先進健康科学研究科の各種委員会委員を担当（全教員）
- 全学委員会委員を担当（教授）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）

**【電気電子工学部門】**

- 自然科学域長、理工学系長、理工学部長（教授）
- 学部長補佐（教授）
- 学長補佐（教授）
- 全学委員会委員（教授、准教授）
- 理工学部組織運営委員会委員長（教授）
- 理工学部教育質保証委員長（教授）
- 先進健康科学研究科学生委員長（教授）
- 先進健康科学研究科教育委員会委員長（教授）
- 理工学部・理工学研究科・先進健康科学研究科の部門長・コース主任・各種委員の担当（全教員）
- 部門関連各種委員（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）

**【都市工学部門】**

- 副学長（教授）
- 副学部長（教授）
- 理工学部各種委員の担当（全教員）、理工学研究科各種委員の担当（全教員）、工学系研究科各種委員の担当（全教員）
- 全学委員会委員（全教員）
- 部門内教育システム委員会（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）

## C. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

### (1) 各領域における自己点検評価点ならびに達成度

教員の総合的活動状況として、教員個人から自己点検された評価の各領域における評価点ならびに達成度の最小値と最大値をそれぞれの部門の教授、准教授、講師および助教について整理したものが下記の表 C.1 である。

表 C.1 教員自身による自己点検評価（評価点ならびに達成率）

学科	職 種	教育の領域		研究の領域		国際貢献・社会 貢献の領域		組織運営の領域		総合 評価
		評価点	達成率	評価点	達成率	評価点	達成率	評価点	達成率	
数理部門	教 授	3 - 5	70 - 90	2 - 4	40 - 80	1 - 3	15 - 60	3 - 4	60 - 90	2 - 4
	准教授 (含講師)	3 - 5	60 - 100	2 - 5	40 - 100	1 - 4	15 - 85	3 - 5	60 - 100	3 - 4
情報部門	教 授	4 - 5	90 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 5	60 - 100	4 - 5	90 - 100	4 - 5
	准教授 (含講師)	4 - 5	90 - 100	4 - 5	70 - 100	3 - 5	75 - 100	4 - 5	90 - 100	4 - 5
	助 教	3 - 5	80 - 90	1 - 5	0 - 90	1 - 4	0 - 90	3 - 4	80 - 90	2 - 5
化学部門	教 授	3 - 5	70 - 100	2 - 5	20 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 5	70 - 100	2 - 5
	准教授	2 - 5	60 - 100	1 - 5	60 - 95	3 - 5	60 - 100	3 - 5	60 - 100	2 - 5
	助 教	2 - 3	40 - 85	2 - 3	40 - 75	2 - 3	30 - 80	2 - 5	40 - 90	2 - 4
物理学部門	教 授	3 - 4	70 - 90	3 - 4	50 - 80	3 - 3	60 - 80	3 - 4	60 - 90	3 - 3
	准教授	3 - 4	80 - 100	3 - 4	50 - 90	3 - 4	50 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 4
機械工学部 門	教 授	4 - 5	80 - 100	3 - 5	60 - 100	4 - 5	80 - 100	4 - 5	80 - 100	4 - 5
	准教授 (含講師)	3 - 5	70 - 100	2 - 5	40 - 100	3 - 5	70 - 100	3 - 5	70 - 100	3 - 5
	助 教	4 - 5	60 - 100	3 - 5	50 - 100	3 - 4	50 - 100	3 - 5	50 - 100	3 - 4
電気電子工 学部門	教 授	4 - 5	80 - 223	3 - 5	60 - 120	3 - 5	70 - 196	3 - 5	70 - 130	3 - 5
	准教授 (含講師)	3 - 5	70 - 100	2 - 5	50 - 100	3 - 5	50 - 100	3 - 5	70 - 100	3 - 5
	助 教	3 - 5	40 - 100	4 - 5	80 - 160	4 - 5	80 - 150	1 - 5	0 - 90	4 - 5
都市工学部 門	教 授	4 - 5	80 - 100	4 - 5	80 - 100	4 - 5	80 - 100	3 - 5	70 - 100	4 - 5
	准教授 (含講師)	4 - 5	75 - 100	3 - 5	70 - 100	3 - 5	75 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 5
	助 教	4 - 4	80 - 80	4 - 4	80 - 90	4 - 4	70 - 80	3 - 4	60 - 80	4 - 4

表中、例えば、評価点(3-4)は（最小値3-最大値4）であったことを表す。

#### 【数理部門】

この表から、各教員は適正な自己評価を行っていると思われる。

#### 【情報部門】

この表から、各教員が適切に自己評価を行っていると思われる。

#### 【化学部門】

達成率は年度初めの目標に対する実績を示すので、達成率と評価点は必ずしも連動するものではないと考えられる。例えば、高い目標値を設定したものの達成率が 100%でなくても、その実績が十分であれば評価点は高く評価したと考えられる。教員毎の判断基準が統一されていないので容易な判断はできないものの、全体的には厳しい環境の中で高い目標を掲げて積極的に挑戦していく姿勢を見て取れる。また令和4年度(2022年度)は前年度に続いて新型コロナウイルス感染症によるパンデミックが研究、教育、社会貢

献、国際交流のあらゆる面に影響したが、オンラインによる講義や各種研修、研究打ち合わせなどに対して多くの教員が適応し、新たなツールを活用したことが評価される。しかし国際交流については人流が滞ったことから、その活動の低下が余儀なくされた。今後はコロナ禍前の状況に徐々にではあるが戻ってくると期待できるが、コロナ禍で獲得したオンライン・ツールなどを引き続いて活用し、国際交流や研究、教育などの各種活動を活性化していくことが望まれる。

#### 【物理学部門】

この表から、教員はおおむね適切な自己評価を行っていると思われる。

#### 【機械工学部門】

この表から、一部の教員においてはかなり厳しい自己評価領域がある。これは教員が提出した自己評価原案であり、評価委員が該当教員の活動に鑑み、適正に修正して提出している。全体としては各教員がそれぞれの職分を考慮した適格な自己評価を行っていると考えられる。

#### 【電気電子工学部門】

この表から、各教員は概ね良好な自己評価を行っていると思われる。

#### 【都市工学部門】

個々人からの申告に基づく自己評価について客観的な実績に照らし合わせた場合、各教員は厳格な自己評価に徹していると考えられる。

## (2) 評価委員からのコメント

各部門の評価委員からのコメントを以下にまとめる。

#### 【数理部門】

- ・ 各教員が真摯に研究及び教育活動を行い、科研費採択、入試問題作成や共通教育などにおいて本学部・本研究科に貢献していることを踏まえると、妥当な評価である。
- ・ 論文発表や国際研究集会への参加および講演など、研究面においても、平均的にみて一定の質の貢献をしていると評価できる。
- ・ 以前よりも教員の教育および組織運営に関する負担は増加している。

#### 【情報部門】

- ・ コロナ禍が続く中でも、令和4年度の教育活動は情報部門の専門性を活かし、成功裏に実施できた。新カリキュラムの完成年度であったこの年度は、オンラインとの併用により、卒業研究指導も滞りなく実施できた。
- ・ 研究活動は、活発であった。原著論文も、主に英語による発表が行われている。
- ・ 国際連携の領域では、新規留学生4名を令和4年度に受け入れ、インドネシア国立マラン大学との連携事業への参加を実現した。これにより、我々の国際連携の幅はさらに広がった。
- ・ 社会貢献の領域では、学会活動の他、国や県の委員会等への参画など、幅広い貢献が

あった。

- ・ 組織運営の領域では、他部局への併任、学内プロジェクトへの参画、法人活動への参画などがあった。

#### 【化学部門】

- ・ 過去 10 年以上にわたって継続された JABEE 認定プログラムの「教育の質保証」の体制を受け継ぎ、応用化学コースと生命化学コースのいずれも PDCA サイクルに基づいた質の高い教育体制を維持している。
- ・ 大学院教育においては、博士前期課程のみならず、博士後期課程においても多くの日本人学生に加えて外国人学生に対しても指導しており、理工学研究科や関連する先進健康科学研究科の定員充足や活性化に寄与している。学生の教育・研究指導の成果は、学会でのポスター賞の受賞などに反映されている。
- ・ 研究においては、ほとんどの教員が査読付きの英文誌に論文発表をしている。発表論文の中にはインパクトファクターの値が極めて高い雑誌への発表も含まれており、質の高い研究が行われている。学会誌から依頼された総説・解説の和文もあり、その分野で脚光を浴びる成果が得られていると考えられる。
- ・ 外部資金獲得においては、科研費をはじめ JST や民間企業と共同・受託研究の申請を精力的に行い、学内研究費の削減を補う努力をしている。このことから各教員の日々の努力を知ることができる。
- ・ 国際貢献について、2022 年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延が原因で国際学会への参加・発表や海外の大学などへの訪問や海外の研究者の招聘などがほとんど停止になった。しかしオンラインでの学会参加などの学術交流が活発だった点が評価できる。
- ・ 地域貢献については、地域の研究アドバイザーとして講師を務める教員や、佐賀県や九州地区の理科教育への協力、佐賀地域の理科・科学振興のための事業への参画など、多くの教員が地域貢献に尽力している。2022 年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延が原因で中止になった行事などもあったが、オンラインでの開催などの工夫もみられた。社会貢献としては、学会の主要な委員を務める、非営利団体と連携するなどして、学会活動等にも努めている。このように、国際・地域・社会貢献にバランス良く活躍しており、優れた貢献をしていると評価できる。
- ・ 組織運営については、全学、研究科、専攻において本部門教員は幅広く組織運営の責務を果たして活躍している。また重責を担う役職を担う教員もあり、その貢献度は極めて高い。一方で、その重責の責務の教員を部門全体で支える態勢が出来ていることも高く評価できる。

#### 【物理学部門】

- ・ 教育の領域では、改組から 4 年が経ち、コロナ感染も一段落したことで、各教員が教育負担の増加に工夫して対処している様子が窺える。教科書やテキストの執筆、e ラーニング、授業動画など教材の工夫が、教養教育と専門科目の双方で行われている。高校生

でコロナ禍にあったためか、基礎学力が十分でない学生も散見される。その対策として、小テストや学習相談などきめ細かな指導が行われている。

- 研究の領域では、コロナ感染がいくぶん落ち着きを取り戻したことから、学外共同研究が再び活発化している。海外の研究施設の利用、大学院生を交えた教育的意義を含む研究も見られる。ほとんどの研究成果は英語による原著論文である。少ない研究予算で、校務が多いなか、質・量ともほぼ例年通りの水準を維持できており、奮闘ぶりが窺える。
- 国際交流や社会貢献の活動は継続的に行われている。専門性を活かしたアウトリーチ活動を積極的に行っている教員もいる。
- 組織運営においては、ほとんどの教員が、部門内から全学に及ぶ職務を誠実に果たし、その円滑な運営に貢献している。入試問題作成など重責を担う業務は、部門全体で業務を支える態勢を築いている。

#### 【機械工学部門】

- 教育に関しては、2022年度当初は対面と遠隔を併用しており、その後は基本的に対面授業となったが、感染拡大防止に留意して遠隔授業も活用することになり、それらの対応に努力する様子が見られる。また、前年度と同様に対面教育と遠隔教育でのそれぞれの教育効果向上に対する各教員の努力の様子が見られる。
- 旧機械システム工学科の教育プログラムは日本技術者教育認定機構の JABEE 認定を受けており、コロナ禍においても教員の日々の創意工夫によって質の高い教育が保証・維持されている。これらを改組後の機械工学分野（機械エネルギー工学コース、メカニカルデザインコース）に引き継がれている。個々の講義に関しては、改組によって、とくに学部共通基礎科目などで教員の負担が増える中、各教員が機械工学分野の学習育目標に沿って学生を育成しようとする努力が見られる。
- 大学院教育では、講義での専門知識の修得に加えて、丁寧な研究指導による学生の能力向上が図られている。英語による教育・研究にも力が入られ、対面も含めたオンラインによる大学院学生の国内外の学会での発表も引き続き多く行われている。
- 研究に関して、国内外の学会などにおいて論文発表が精力的に行われている。研究費は、科学研究費補助金のみならず、法人からの補助金、企業との共同研究、受託研究、奨学寄付金、財団からの教育研究助成、受託事業などの受け入れ、NEDOなどのプロジェクト研究についても積極的かつ継続的に取り組まれている。これらのことから、部門内教員の研究に対する国の機関や民間企業等の強い期待が伺われる。
- 社会貢献・国際交流では、学会等の役員および委員会委員などの活動を引き続き行い、また講演会、研究会なども精力的に開催している。さらに、国外研究者、留学生（学部、大学院）の受け入れや、国際会議においての情報交換も積極的に行っている。
- 組織運営に当たっては、機械工学部門が担当となる研究科および学部、また部門内の様々な委員を全教員が誠実に努め、責務を果たしている。

#### 【電気電子工学部門】

- 教育の領域においては、今年度より本格的に対面授業が中心になったが、コロナ禍において蓄積されたオンライン、オンデマンドのコンテンツやソフトウェアを有効活用し、教育効果と質の向上を図る取り組みがなされていた。各教員によって様々な取り組みが行われているが、それぞれが予習と復習の充実や、欠席者への配慮などを目的としていることが窺える。また、FD 活動へも多くの教員が積極的に参加し研鑽を積んでいる。学会発表における受賞数も多く、学生への卒業研究や特別研究の指導の質が保たれていることが示されている。
- 研究の領域においては、概ね昨年度と同水準と判断され、質の高い論文発表が継続されており、様々な共同研究が行われている。研究成果による受賞も多く、全体的に研究活動の質と量は維持されている。
- 国際交流実績においては、留学生や客員研究員の受け入れ、国際共同研究の実施などが活発である。各教員は、国際学会等への参加に加え、様々な活動にも取り組んでいる。社会貢献の領域では、学協会での様々な役員や役割を担当しており、高大連携や地方貢献などにも積極的に関わっている。
- 組織運営においては、自然科学域長、理工学系長、理工学部長、学部長補佐、学長補佐、理工学部および先進健康科学研究科の各種委員会委員長を務めている。全学、学部、研究科、部門内における委員も含めて、組織運營業務を着実に遂行している。
- 4つの領域すべてにおいて、活動状況は良好である。各教員の活動状況と自己評価に応じて、より高い目標の設定と、目標達成に向けての努力、目標の追加や再設定などによって新しい活動を開始するなどが期待される。

#### 【都市工学部門】

##### <教育について>

- 退職教員の不補充に伴う現員教員の教育負担（担当コマ数、担当科目数）が増大した。
- 卒研学生指導数について、令和3年度から令和4年度にかけて指導数は1名程度減少している。正規の学年の卒業研究着手数で満たされ、過年度生の同数が減少していることなどが考えられる。しかしながら、令和4年度末にさらなる教員の定年退職が生じており、令和5年度以降の指導数の増加は避けられないと判断するのが妥当といえる。
- 学生による授業評価アンケートの結果を踏まえ、学生の理解を深化させるための工夫が実践されており、全体的に授業方法の改善が図られていると考える。なお、部門内のコースに属する科目の性質によっては担当教員の過負荷が生じている実態も浮き彫りになっていることから、改善のための対策を図ることは焦眉の急といえる。
- 新型コロナウイルス災禍に伴う人流抑制の緩和が認められる年度であった。同災禍中に培われたウェビナーの有効利用など、多くの教員が工夫を重ねており、中には同災禍の収束後にも持続発展が図られるアイデアもあった。

##### <研究について>

- 研究に関する個人目標の達成率の下限値について、教授で85%、准教授（講師含む）で

70%、助教で80%であり、総じて良好と評価される。一方で、研究の評価の一つとしての論文数は、これまでと変わらず教員間でばらつきが大きい。

- 令和3年度の結果に比べ、論文数は職位によらず横ばいから増加の結果を得ている。理由の一つは多くの博士学生の輩出を控え、修了根拠の確保に向けて執筆活動が盛んになったことが考えられる。なお、業務多忙な役職に就く教員が増加してきている。令和5年度も論文数の向上を維持できるか試練になる可能性は否めない。
- 不幸中の幸いとはいえ、新型コロナウイルス災禍の折にウェビナー技術が培われた。今後の研究活動の活性化のために、同技術の持続発展に基づく講義の負担低減を図ることを始め、組織運営の効率化に基づく負担低減を図ることによって研究時間を確保する努力の必要性は論を待たないが、それでもなお限界は避けられない。教員と技術職員の増補は焦眉の急である。
- 都市工学部門の学問分野的特性により、共同研究は活発に行われており、国・県の自治体との間の連携を始め、企業との間の共同研究も含め、多種多様な形で取り組まれているのうかがえる。
- 当学の財源に基づく研究費配分の期待が難しい昨今、全ての教員が科学研究費を始め、学協会・財団等への申請に向けた努力を惜しまない姿がうかがわれる。他方、大型予算の獲得に際し、個人の努力では対応が困難となりつつあり、学内外の研究者との間の研究連携を進めるなどの努力が必要である。特に、最近の競争的外部資金の応募条件では、若手研究者を代表者にすべきことを掲げる機会が少なくない。若手研究者の増補もまた、焦眉の急である。
- 近年の自然災害に対する防災・減災の地域ニーズに照らし、2019年度末から都市工学部門内の教授を中心として、学際的研究拠点化も念頭においた概算要求の申請準備を整え応募したが、採択に至っていない。将来的には、旧低平地防災研究センターに匹敵、または超える新たなセンター設置の実現について検討し続けている。
- 令和4年度から認められ始めた新型コロナウイルス災禍に伴う人流抑制緩和の動きが令和5年度以降に本格化すれば、従前の学協会も活性化を取り戻すであろう。結果として、論文数や研究費獲得に関する向上の期待も高まるが、他方で各教員における講義の負担低減化を始め、組織運営の効率化に基づく負担低減化が図られなければ、新型コロナウイルス災禍前の水準に回復するのは困難かもしれない。

#### <地域・国際貢献について>

- 多くの教員が官公庁または企業における各種の委員会、審査会、講演会等に対応することによって、地域社会に貢献している。
- ほとんどの教員が国際的な活動に積極的に関わるとともに、外国から研究員、修士学生、博士学生、SPACE-E 学生を受け入れてきている。さらに、海外の大学における講義を始め、国際共同研究の実施により、活発な交流がなされてきている。令和4年度から認められ始めた新型コロナウイルス災禍に伴う人流抑制緩和の動きが令和5年度以降に本格

化すれば、さらに活発な業績向上の期待が持てる。